

第44回 日本ジオパーク委員会 第二部 議事録

日時：2022年1月5日(水) 10:00～16:00

場所：日本ジオパークネットワーク事務所（Zoomによるオンライン開催）

<委員長>

中田 節也 東京大学名誉教授・防災科学技術研究所 火山研究推進センター長

<副委員長>

宮原 育子 宮城大学名誉教授・宮城学院女子大学現代ビジネス学部 教授

<委員>五十音順

大野 希一 鳥海山・飛島ジオパーク推進協議会 主任研究員

久保 純子 早稲田大学教育学部 教授

黒田 乃生 筑波大学芸術系 教授

欠 齋藤 文紀 島根大学研究・学術情報機構 エスチュアリー研究センター長・教授

柴尾 智子 元公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

菅原 久誠 群馬県立自然史博物館 副主幹（学芸員）

田中 裕一郎 産業技術総合研究所 地質調査総合センター

新名 阿津子 東北公益文科大学 公益学部 准教授

橋詰 潤 新潟県立歴史博物館 主任研究員

長谷川 修一 香川大学名誉教授 四国危機管理教育・研究・地域連携推進機構副機構長
／危機管理先端教育研究センター長

ヴォウォシェン・ヤゴダ 一般社団法人隠岐ユネスコ世界ジオパーク推進協議会 国際交流員

山口 勝 日本放送協会 横浜放送局チーフアナウンサー

渡辺 綱男 自然環境研究センター 上級研究員

渡辺 真人 産業技術総合研究所 地質情報研究部門・GGN執行委員会委員

<日本ユネスコ国内委員会事務局>

原 文絵 文部科学省 国際統括官付 国際統括官補佐

岡本 彩 文部科学省 国際統括官付 ユネスコ第三係長

川崎 美海 文部科学省 国際統括官付 ユネスコ第三係員

<関係省庁（オブザーバー）> 建制順

沼 美紗 内閣府 地方創生推進室 参事官補佐（内閣府 地方創生推進事務局）

末永 珠佑 内閣府 地方創生推進室 主査

（内閣府官房 デジタル田園都市国家構想実現会議事務局）

柴田 伊廣 文化庁 文化財第二課 文部科学技官

道面 和久 国土交通省 水管理・国土保全局 砂防部砂防計画課 地震・火山砂防室 火山対策係長

國分 さゆり 観光庁 観光地域振興部観光資源課 新コンテンツ開発推進室 主査

萩野 周 環境省 自然環境局 国立公園課 国立公園利用推進室 エコツーリズム推進専門官

<事務局>

斉藤 清一 JGN 事務局長

古澤 加奈 JGN 事務局次長
宮崎 博子 JGN 事務局員
甲 健太 JGN 事務局員
関村 絢 JGN 事務局員
古屋 牧人 JGN 事務局員

【開会・委員長あいさつ】

委員長：前回に引き続き第2回目。

皆さん明けましておめでとうございます。本年もよろしく申し上げます。

今回は6地域の再認定と、五島列島の経過説明、それから山陰海岸と阿蘇についての現状確認がある。午後まであるが1日よろしく願います。本日の午前中は島根半島、おおいた姫島、おおいた豊後大野、三笠、そして記者発表資料の作成の順番で行いたいと思う。

【議題⑩ 再認定審査地域審査：島根半島・宍道湖中海】

委員長：最初に議題⑩の再認定審査地域の審査ということで、島根半島・宍道湖中海。

委員：それでは島根半島・宍道湖中海の調査結果を報告したいと思う。

10月下旬に行ってきた。結論から言うと、グリーンとしている。ただ、ちょっとイエローに近いグリーンかなというところもあるので、そこは審議の程よろしく願います。

まず、前回審査指摘事項の対応から報告する。前回審査では4点指摘されており、1点目はジオサイトの解説板・案内板の整備ということで、ほとんどされていなかった。2点目の拠点施設の整備もそうだが、この辺のインフラ整備が出来ていないままに認定をしてしまったというのが前回課題かなというふうにも思ったが、その辺りがこの4年間進んだというのがある。ただ、ジオサイトの解説板・案内板の整備はかなり急いで作ったためか、誤字脱字などのあり得ないミスが結構目立ってしまっており、その点が少しマイナスポイントなので△にしている。

拠点施設の整備・拡充については4つあり、それぞれ進んだので○。来訪者の導線の検討で、案内板の指示器や導線の矢印看板、ユニット看板のそういったものが設置されていた。松江駅の前や出雲駅の前のインフォメーションカウンターにきちんと整備されていたので、この点についても○。

ガイド団体の連携についても、実際に「出雲国ジオガイドの会」が設立されて活動を開始しているし、シャガールとか既存団体の方々もそこに入って活動を展開されているのでこの辺りもクリアされていた。

前回の審査の時に「国引きジオパーク」でいこうと審査員の方に言っていたのに、ふたを開けたらそれはダメだと言われて、自分達はやはり「国引きジオパーク」という愛称を使いたいのだが、委員会としてそれは認めてもらえるのかという相談があった。現場で過去の経緯を伺いつつ判断するのが難しかったので、この後の質疑応答の部分でご意見をいただければと思う。ただ、島根半島・宍道湖中海は漢字9文字もある非常に長い名称のジオパークで、自分達もジオガイドの会の愛称が「出雲国」だったり、ジオブランドに「国引き」を使ったりなど、ジオパークで用いるブランド名称が複数あり、なかなかブランド戦略自体も持ってもいないので、その辺りの考え方を整理するように現地に伝えた。愛称としての「国引きジオパーク」の使用についてご意見等をいただければ幸い。

それでは今回の調査における主な評価点について報告する。

まず、今回評価できるのは、前回整備されていなかった拠点施設の看板整備によって、ビジビリティが向上したこと。そして、情報発信機能が強化されたということは、非常に評価できて一番進んでいるところだと思う。

2 点目のボトムアップのジオパークの活動だが、既存団体が松江などにもたくさんあり、そういった団体と新しくできた「出雲国ジオガイドの会」が非常に活発にジオパークの活動をしていた。公民館活動でも、ジオパークの活動を取り入れて勉強会や研修会を開かれたり、看板を設置されたり、非常に熱心に活動をされていたので、ボトムアップのジオパークの活動を展開しているということも評価できる。

ジオガイドの会の発足と、ツアーアクティビティの開発が進んだということも評価できる。特にツーリズムに関しては、環境系のツアーでゴミ拾いや、海岸清掃を観光に取り入れてみたりなど、そういった点も評価できる。

島根大学が地学教育プログラムを学校の先生と一緒に作っていて、実際に大学の先生が教育の現場に行って子供達を指導するということがされており、なかなか質の高い地学の教育プログラムが出来ているのが評価できた。

公民館による積極的なジオパーク活動は、先程申し上げた通り。

JGN のオンライン全国大会を去年（今年度）開催した。これによるネットワークの貢献は、初めてのオンライン開催ということもあり非常に大きかったと思うので、そこを評価している。全国大会をオンラインで開く過程の中で事務局自体が島根半島・宍道湖中海の「ジオパークとは何か」というのを学び直す事にも繋がっていたので、そういった面でもこのオンラインでの全国大会の開催は島根半島・宍道湖中海ジオパークにとっても、JGNにとっても、非常に有意義なものだったと評価した。

海岸および生態系の保全を目的とする清掃活動をしていたり、あとは「秘密結社鷹の爪」の吉田君を皆さんは見られたか。YouTube のアニメーションでジオパークの事を取り上げてくれているが、そういう現代的なインターネットを利用した動画配信による広報活動も評価できる点だと思う。

一方改善を求める点で、基本計画が島根半島・宍道湖中海構想のままでこの4年間改定されていなかった。その改定が早急に必要になることと、ジオサイトの保全計画がまだ全くなかったので、それを早急に2年以内に作ってくださいというのがある。

3 点目としては、観光公害が発生しているのでその抑制策や、ジオサイトの安全管理調査は完了しているが、そこに行くまでの注意喚起がツーリストに向けて発信するということが出来ていない。観光客を受け入れるためのサイト整理などの改善を求めたいと思う。

地学教育は出来ているが、災害への防災減災教育があまりされていなかったなので、そういった事を推進するようにリコメンデーションを出したいと思っている。

ビジビリティだが、だいぶ確保されたが、まだまだ甘いところがある。看板は立てたけれども、看板が全然目立っていなかったり埋もれてしまっていたり、字が小さすぎたりする。そういったものがあつたので、この辺の改善を求めようと思っている。

出雲科学博物館が出雲市の小中学校しか無料で利用できなかったなので、せっかくジオパークを2市でやっているの、松江市の学校も利用できるように勧めたいと思う。

ジオパークのロゴマークや関連の出版物についてだが、ジオパーク出版物を色んなアクターが出すが、そのデザインの統一性を事務局がちゃんとマネジメント出来ていなかったの、ちゃんとマネジメントすることが課題。

最後は、神話や古代史関連サイト、出雲風土記のサイトについて非常に語られるが、これ以外に築地松や風土と結びついた文化遺産や自然遺産の発信が非常に弱かったので、この辺りの結びつきをもっと強化して発信するということ改善を求めたい点である。

地質鉱物資源販売を中止し、資源管理について検討することについては、調査員2人の間で意見が割れた。産業で伝統工芸にも指定されている来待石を使った石灯籠が石材産業としてあるが、その石灯籠の技術を持って作られた照明器具が、パートナーの博物館であるモニュメント・ミュージアム来待ストーンという博物

館で販売されている。それを即刻中止して協議会からそのミュージアムを外すべきだという調査員の意見と、それは伝統産業だからもう少し議論と対話の中で保全計画と一緒に考えながら伝統産業を守るべきだという調査員の意見で割れた。伝統工芸の取り扱いについて少し議論していただければと思う。現在、JGN の保全ワーキングが出している指針によると、石材販売している所を協議会から外すようにと書かれている。それは 2018 年のもので今も JGN の Web サイトで公開されていてそれが基準になっているが、最近のユネスコのジオパークの状況を見ていると、そういったところも一緒に対話をしながら資源管理を考えていきたいと思いますというふうになってきていると思うので、この辺りをどういうふう考えていったらいいのかアドバイスをいただけたら幸い。

結構、出来ていない事もたくさんあるにはあるが、今回の全国大会を通じて事務局が非常に前向きになって、市長も含めジオパークの理解が地質公園からジオパークへ転換したので、4 年間を使ってさらなる改善や飛躍に期待したいと思いグリーンカードとした。審議の程、よろしく願います。

委員長：いくつか問題や意見募集があったが、まず質問から願います。その後に名称の問題、来待石の問題についても議論したいと思う。

委員：この地域は大山隠岐国立公園で、大山と隠岐と島根半島地域が主要な構成地域になっていて、国立公園も重なっている。中海宍道湖はラムサール条約の登録湿地にもなっていて、それに行政機関や NPO の自然再生センターも関わっている。国立公園のレンジャーも松江にも管理事務所があり、ジオパークの事務所の近くに環境省の人もいる位置関係にある。その保全保護計画を作り立案していかなければならないという中で、そういった行政機関や NPO と連携しながら作っていくことが大事かと思うが、その辺の連携はまだ弱い状況なのか。

委員：人ベースではかなり強い連携が出来ているので、後は組織間の連携が見えるようになるとさらに良くなるかなというところ。人同士の連携は良くとれているので、そこをベースにパートナーシップ協定などに発展して欲しいなと思っている。

委員：今後に期待したいと思う。

委員長：他に質問はないか。

委員：ビジビリティについて聞きたいのだが、隠岐から島根半島に出掛けるとジオパークに入ることなのだが、色んなサイトを個人的に周ったところ、ビジビリティとしては国立公園だったり、他の組織が目立つが、その中でジオパークとしてはビジビリティ関係や情報発信関係の何か戦略があるのか。それともこの数年間で何か改善があったのか聞きたい。

委員：確かにおっしゃる通り埋もれている。あまり目立たない。ただ、4 年間の前進としては、なかったものが出来た、0 を 1 にしたというところで今回は評価した。ただし、これが効果的かどうかという点に関してはやはりまだまだ課題があるので、それに関しては今後 4 年間で改善してくださいというリコメンデーションを出したいと思っている。その辺は事務局も少し認識はあるようで、おそらく今後改善されると思う。

委員：承知した。

あと、どんな観光公害があったか教えていただけると嬉しい。

委員：コロナの影響で、桂島でのバーベキュー需要があり、キャンプをしたりバーベキューをしたりする人達がやって来た。けれども、ゴミをそのまま置いていたりしてゴミの問題等が発生したので、キャンプ、バーベキュー禁止の立て看板をずっと道に立てる対策をとっていた。それはジオパークとしてというよりは、管理している集落が実施している。ジオサイトでジオパークの看板も設置しているので、今後はジオパークと一緒に観光公害を抑制するような策を考えたりできるといいですねという話を区長さんはおっしゃっていた。

もう一つは、やはり出雲大社の周辺サイトの混雑や、稲佐の浜で観光客が巨大な岩石の所にお金を置いて

お参りをされていて、岩場にお金を置くという行為が観光公害になっている。これについては近くにお賽銭を入れられるよう浜に人工物を建てて対応をしているので、その辺に関しても出雲市もジオパークと一緒にオーバーツーリズム対策を今後検討して欲しいという話しも現場でしてきた。

委員：承知した。

委員：全般的な共通事項になるかもしれないが、管理計画と保全計画はどの程度マストなものなのか。あるいは何年に1度更新しなければならないのか。

委員：前のユネスコの自己評価表だと10年以内に作成されたものを持っていることという基準があった。その中にこういった項目があるかというチェック項目がある。その中にも保全管理計画が書かれていたので、ほぼほぼマストだと思う。

委員：10年以内ということによろしいか。

委員：ただ、おそらく多くのジオパークが再認定再審査を目途に4年で見直しているところが多いのではないかと思う。毎年、見直しされるというのが理想的な形かとは思っている。

委員：承知した。私共の担当でも、あるようなないような感じだった。

委員長：管理計画は国内のジオパークに限っては、完全に揃っているというわけではない。今回審査したのも不揃いはあるのは事実。

その他コメントはあるか。先程の名称と来待石の話も含めて議論していきたいと思う。名称については、前回からそういう議論をしているが、「国引き」という言葉を名称に使うのはあまり好ましくないと思っている。見た人はどこかさっぱり分からない。どこに行けばいいのかも分からないし、海外に対して発信する時もこれをどう訳すのかというのもある。そういう事を考えると、これを正式名称にするのは、私は反対。でも使った方がよいという意見もあるかもしれないので、意見分布を知りたいと思う。いかがか。

委員：今の点に関してだが、正式名称ではなく愛称として使いたいそう。

委員長：愛称ならば全然問題ないと思う。

委員：承知した。

委員長：愛称だと分かるようにし、愛称イコールそういうものだと辿れるようになっていけば問題ないと思う。

委員：愛称で使いたいというのは、具体的にどんな使い方をする事を考えているのか。

委員：どうなのだろうか。そもそも「島根半島・宍道湖中海」が長いし、中海宍道湖なのか宍道湖中海なのかで迷う。そういうのもあって、短くしたいのはあると思う。

委員：使い方の方向性が見えたりとか、JGCとして認めたのは「島根半島・宍道湖中海」という名称なので、それをちゃんと認識できるような形であればいいのかと。使い方に関してもうちょっと情報があればいいなと個人的に思った。

委員：「国引きジオパーク」という愛称をどこで使うか、いきなり全部のパンフレットで「国引きジオパーク」になってしまったら、それはもう正式名称が使われなくなってしまうので、意味の分からない状況になってしまう。今は事務局では自分のメールの署名のところに(国引きジオパーク)をすでに使っていると思うが、いけないのであればそれも伝えたほうがいいと思う。

皆さんがおっしゃっている通り、隠岐ではよく山陰海岸ジオパークと島根半島・宍道湖中海が近いのでよく紹介するが、島根半島・宍道湖中海ジオパークと言うとお客さんが途中で頭が効かないという状態になってしまうので、確かに名前が長すぎるのでブランディングで使おうとしているのであれば、もうちょっと聞いてぱっと頭に残るような名前にしたほうがいいと思う。

事務局：今の話して、メールで「国引き」で使っているのは協議会の名称には正式に「国引き」と入れている名称。なので、メールはそういうふうには発信されている。ただ、「国引き」という名前で非科学的な話しとごっちゃ混ぜになるというところが問題になるということで、前回の新規認定の際には保留となった1つのポ

イントでもある。その辺りは、そのことも踏まえて今後どうして行くのかというのをお話しいただければと思う。

委員長：あまりこれに時間をかけることも出来ないが、強い意見がある方はいるか。

一同：(意見なし)

委員長：愛称として使うのはよいが、ちゃんと本来の名称が分かるようにして欲しい。

次の来待石についてはどうするか。個人的には販売しても構わないと思うが、拠点施設で堂々と売る物でもないという気はしている。地元産業の1つなのでこれは振興していくべきだと思うし、見せ方は難しいと思うが、ミニチュア版などを販売するのは拠点施設でも構わないと思う。本格的な物を拠点施設で売るのはやはり変だという気はする。

全く売るなという事ではなくて、地元の産業の紹介、地元の地質の紹介をする上での商品だと思うので、管理計画がきちんとされていけばという形で、これを保存しながら製品を作っているという事がきちんと分かる様に販売するようであれば、小さい物に限っては構わないのではないかという気はする。

これに関して、どなたか意見があればお願いします。

事務局：先程の報告の中にあつた JGN の保全ワーキングの指針だが、その中で地質物品の販売禁止については確かに項目があるが例外規定もある。「地質物品の販売は、それが地域の事情を考慮して最良の選択肢であり、対象物の持続可能性が認められ、監視が可能であることなどの場合に限り、認められる場合があります。」という一文がユネスコのガイドライン同様に入っているので、今、委員長がおっしゃった通りかと思う。

委員長：他に意見がなければ色を決めたいと思う。部分的にはイエローなどところがあるが、全体的な流れからして不備はあるものの、黄緑っぽいグリーンという形かなと私は印象を受けるが、皆さんいかがか。これがなければイエローだという強い意見はあるか。

一同：(意見なし)

委員長：それでは島根半島・宍道湖中海を条件付きなしの再認定としたいと思うが、賛同する方は挙手か拍手をお願いします。

一同：(挙手及び拍手)

委員長：島根半島・宍道湖中海を再認定とする。

【議題⑩ 再認定審査地域審査：おおいた姫島】

委員長：続きまして議題の⑩のおおいた姫島に移る。

委員：おおいた姫島ジオパークには11月4日から6日の2泊3日で、2人で調査をしてきた。

前回指摘をされているところが、ストーリーの再構築や農業遺産の活用までの7点。評価される点の一番初めのところにも書いてある通り、これらに対する課題解決ないし課題への対応が行われていて、放置している案件が1件もなかったのが、結論から言うとグリーンカードを提案する。

ストーリーの再構築に関しては、2020年のJpGUでの発表で、外部の声を取り入れながらボトムアップで作り上げて行き、それで姫島物語というリーフレットを作っている。地球規模、瀬戸内海規模、姫島規模の視点で整理してストーリーをみんなで作っていったということ、人の暮らしと結びついていることをストーリーに反映させている。

ウェブサイトの充実もITアイランドということで、かなり姫島がIT関係に力を入れていて、前回指摘されていた専門用語が多いということや、コンテンツがちょっと分かりづらいところを改善すると共に、1つの姫島のウェブサイトの中にジオパークのウェブサイトを埋め込むような形で改善している。次の国際化対応に関連するところだが、自動翻訳機能というのを付けて、国際化の対応も出来るようにリニューアルされている。なので、かなりウェブサイト自体は見やすくなっていると思う。

ガイドの質の向上と平準化については、先程の JpGU での発表や、ジオパークの全国大会の大分大会で発表をしている。最近の話だとオンラインツアーをやっていたりなど、そういう機会もあってかなりガイドさんが自発的に集まってみんなでストーリーを作ったり、お互いに評価し合うみたいなことをしながら、ガイドの質の向上が行われている。あとは、学識経験者とつながって指導してもらいながら進めているので、その辺りも評価できると思う。かなり良い流れが出来ている。

次の露頭の保全や整備のところは、特にコンクリートラミナの崩落があったということだが、方針としては自然に変化して行く現状というのをそのまま伝えていこうということ。ただし、安全は管理するので、かなり強固なフェンスを設置し、道路側にも崩落してもその石が転がっていかないような形になっている。

あとは、島のガイドさんを中心に SNS で LINE グループを作っていて、島を回っていてジオサイトの変化が見られるとすぐにリアルタイムで画像付きで共有されるような体制が整っている。ただ、強制ではないので、LINE グループに入りたいガイドさんがどんどん積極的に入って情報共有をし、保全保護に役立っている。

解説板やパンフレット類の再整備は、先程申し上げた姫島物語を作ったのが一つの成果。解説板は今後改善を求めるところにも含めているが、同じ内容の解説板がいっぱい立っている。なので、すりこみという意味では島民の方にはいいと思うが、観光客にとってと言うと首をかしげるようなところもあるので、一般観光客の視点で行う案内看板の改定というところ。ただ、急ぎ仕事でやってしまうとちょっとまずいところがあるので、ボトムアップで良い状態で情報を集約してそれを発信するということが行われているので、そのフレームワークの中でこういった案内看板に関しても取り組んでいただきたいと思っている。

一番始めのところに戻って管理運営体制のところだが、見させていただいたところ、県のバックアップがとても大きくて、ステークホルダーとして県が手を引いてしまったりするとかなり打撃を受けるなと思った。バックアップ体制は継続的に行っていくという県の意思は確認している。

あとは各グループについて、民間企業や NPO 団体がかなり密接に関わっており、ジオパークの会議などにも出席している。メンバーがジオガイドにもなっている。なので、管理運営にそれらのステークホルダーが関わっているという体制が出来ているのでなかなか良い状況だと思っているが、改善を求めると一番重要な点で、管理運営計画がない。それで上手く回せていられているのは不思議。こういう中長期的な管理運営計画を作っていただきたいので、一番重要なポイントとして指摘したいと思っている。

最後の農業遺産の活用のところは、プログレには体験素材集を公表したり、教育旅行のオプション体験プログラムでおいた姫島を取り上げてもらったりしている。内情としては、世界農業遺産の事務局のほうが推進という形であまり動いていないのかという状況で、口頭では農業遺産と連携して進めていくようなツーリズムを考えて欲しいということを伝えてある。何らかの成果、動きはあるが、農業遺産はもうちょっと頑張ってもいいのではないかと思っている。

主に評価できる点については、一番目は先程申し上げた通りで、特出ししたいのは 2021 年 3 月に国の重要文化的景観に選定された。この準備段階において、検討委員会の委員にジオパーク事務局のメンバーも入っている。この中でストーリーの再構築や、ストーリーを吸い上げてまとめるということが網羅的に行われた。なので、それプラス、ガイドさんたちボトムアップでそれを集めていくような事をしたので、かなり重要文化的景観というのは色んなところに大きく寄与している。

保護保全に関しては、法的根拠をつけろということなので、一つのジオパークの保護保全の計画を立てるという中では、重要文化的景観を使うというのはすごくパワフルだと感じた。

特出しをする最後の点は、先程申し上げた通り、ガイドさんを中心にボトムアップでどんどん動いて行くという素地が出来たというところ。それぞれのガイドさんの関係も良好で、情報共有をしながら色々新しい取り組み、例えばオンラインツアーの取り組みをいち早く始めて、それぞれが意見を出し合って進めて行くということが出来ているので、今後期待できると思う。

委員長：ただ今の報告について質問等あればお願いします。

文化的景観がかなり大きな位置を占めているという報告だったが、何かコメントはあるか。

委員：重要文化的景観は良いことだなと思う。先程計画の話しをされていたが、重要文化的景観にするためにかなり具体的な景観計画を立てているよう。独自の計画を立てるよりは、ここは島全域に何らかの区域指定がかかっているようなので、そこでジオパーク的な視点で足りない様なところを追加していく形がいいのかなと思った。

委員長：その他、コメント含めてお願いします。

事務局体制については言及がなかったが、人数は少ないままなのか。

委員：人数的には同じ。専門員が1名という状況で、少ないと言えば少ないと思う。ただ、姫島全体から見るとそうではないのかなとは思。専門員が人員不足という悩みを持っていなくて、他の人達がある程度サポートしているような雰囲気が出来ているのかなというような感じがした。

委員長：県のサポートというのはおそらく、村長の存在が非常に大きくて、村長と県知事が非常に厚誼されているということが大きいのかなという気がする。今後、村長や知事が変わった段階でどうなるかというのは少し気になるところ。

委員：次回の再認定審査までに村長の選挙がある。知事選もあったと思う。なので、その2点は申し送り事項としてみておかないといけない点。

ステークホルダーとしては京大名誉教授がすごく大きな存在なので、この方が手を引くということはあまりないとは思いますが、少し注視しておくべきかと思う。

委員長：その他コメントはあるか。

委員：1つだけ気になるのだが、前に指摘されていた国際化の対応と、引き続き指摘する予定である国際化の対応は、どうしてそこまで国際化を推進しなければならないのか。姫島は観光的視点から外国からの観光客が多く来ているなどの背景があるのか。

委員：背景として、バックパッカーが入っているという報告が前回の指摘事項の中にある。海外のバックパッカーが、得やすい情報のところに姫島が含まれていて結構多かったのでは。ただ、コロナ禍でそういった海外の旅行者というのが少なくほぼ0に近い形だが、その中でもウェブサイトは充実させようというところで、1歩先に進んだという形。

看板に関しては、現状ではQRコードを追加して対応しているので、それに対してどういうふうに取り組んでいくかが今後の課題だと思う。

委員：承知した。姫島の予算がどれくらいあるか分からないが、そこまで観光的な需要がなければ負担がかからないような考え方、やり方があればいいなと思った。

委員：SNSを使った広報も、SNSを使って広報をして下さいという前回の指摘事項の中にもあったが、上手くそこは進めていない。これは簡単に出来ることなのでお願いしようと思っている。

委員：承知した。

委員長：その他はあるか。なければ、報告通りこの地域をグリーンということで認定してよろしいか。反対の方はいるか。

一同：(意見なし)

委員長：賛成の方は挙手か拍手をお願いします。

一同：(挙手及び拍手)(全員挙手)

委員長：それではおおいた姫島を再認定とする。

【議題⑫ 再認定審査地域審査：おおいた豊後大野】

委員長：次はおおいた豊後大野。

委員：おおいた豊後大野は、結論から言うとグリーンで提案したいと思う。

指摘事項についてはほぼ対応出来ていた。ただ、指摘事項で「テーマの明確化」と言ったがために、真面目に考えすぎたのか非常に長い「巨大火砕流から9万年、生命を紡ぐ豊後の水と大地の彩り」というテーマを一生懸命に考えて、これを塩ビの横断幕にして道の駅などに張ってある。どこが豊後大野ジオパークなのか、ここがジオパークですよという看板がほとんどなくて少し困ってしまった。非常に大きな課題としてはビジビリティの問題というのがあると思った。

良い点から言うと、小学校のジオ教育が非常に進んでおり、「全ての教科×ジオ」という形で、防災教育や地域のジオサイトの石像などを大事にすること、そこに来るおじいちゃんおばあちゃん達のためにベンチを作ってあげようなどの提案型のところまで持続可能な社会作りを小学生が提案して、近所のお父さんお母さん、おじいちゃんおばあちゃん達を巻き込んでより良いジオサイトに行っているという動きがあった。

市長や教育長、前の事務局スタッフが非常に良くジオパークというものを理解されており、ケーブルテレビを使って市長自らMCになり、フレンドシップ、協定を結んでいるような事業者、キャンプをしているところやお土産を作っているところ、道の駅などの人を呼んで、どうしたら良いジオパークになるのか、これから地域には何が必要になるのかといった対話型のシリーズの番組を作ったりしている。学校教育、ジオパークのフレンドシップ、ジオガイドさん達の活動が非常に良い。

残念なのは現事務局の皆さん。商工観光課の皆さんだが、全く分かっていないという事がよく分かった。それは全国大会をやってしまったがために、今回我々が行く時も何というふうにオファーが来たかという、「大分市内でも豊後大野市内でもどこでもいいので、18日の朝8時に出発するので、そこまでは勝手に来てください。」という案内が最初我々調査員にきた。調査は11月17日から20日に行った。我々は再認定の調査に行っているが、「意見交換会」という言葉を盛んに使っており、「違うんです、説明してください。」という感じがあったりした。結果としては「空港にちゃんと迎えに来てください。熊本空港に入ったらいいのか、大分空港に入ったらいいのか、そこでビジビリティのチェックもするのでどっちがいいか教えてください。」ということでこちらからお願いしたし、もう一人の調査員は大分駅に着くので駅でのビジビリティの観光案内などのチェックをしていただいたが、事務局の皆さんがほとんど分かっていないという感じだった。それはフレンドシップを結んだ事業者、ガイドの皆さんが本当に良く分かっていて一生懸命やっているの、むしろ不満が溜まっていて「今の事務局は全然我々の所に来ないし、話しもしてこない。一体どうなっているんだ。」という話を事前に聞いていた。事業者での懇親会も直前で行われるようになって、そこで「一体どうなっているのか。」という話しをしたらならば、フレンドシップ、協定を結んでいる皆さんも分かってもらって良かったという感じになり、そこは事務局の方がほとんど分かっていないということで非常に大きな課題だと思った。

懸案だったエコパークの連携についても、会長自らエコパークと連携していかどうか分からなかったということだった。県から指導、支援があるといったことも特になく、そこは是非一生懸命やってください、看板1つ設置するならジオパークとエコパークをつけてくださいという事もお願いした。

すごく良い点だが、豊後大野の新しい資料館が市役所の隣に出来た。ジオパークとして素晴らしい展示をしている。ただ、ここにジオパークという言葉が一言も入っておらず豊後大野市資料館という名前になっている。館名自体を変えるのは難しいかもしれないが、せめて呼称にジオパークを入れて欲しいという願いをした。事務局も一晩持ち帰って、翌日の回答として教育長も是非ということなので入れたいと思いますということになった。会長と最後の面談の時にもこれをお願いしたら、是非入れたいということだったので、緊急に解決すべき課題として敢えて、資料館に館名もしくは公称にジオパークを入れることと書いた。

同様にジオパークをアピールすることがすごく下手というか慎重深いというか、だいたい豊後大野市はどこにあるかというのが普通の人はなかなか分からない。現地は道の駅を中心とした車でアクセスする方が多いので、どこからがジオパークなのか、豊後大野市なのかというのも分からない。道の駅は一生懸命ジオパークの拠点になっていてすごく良いが、その道の駅にせめて「ジオパーク」というのを一言書いてくれというのをお願いしたところ。

解説板なども付け替えなどで移転している。移転した看板を見ると「この向かい側にジオサイトの神社がある」などが書いてあるが、全然違う所に移転しているので神社がない。その辺の学術的なフォローが行き届いていない。それをいつの学術的な事実で記載したのかというのをちゃんと書くことと、QRコードをもっと入れて下さいなどのお願いもした。

火砕流堆積物を中心とするジオパークなのに、国際的な学術的研究がほとんどない。これは是非推進して下さいということをお願いした。

産総研にいた専門員が、Iターンでここに来て、自らガイドの会に入って副会長になって、非常に良く活動してくれている。先程言ったケーブルテレビにも自ら出演して、それぞれのジオサイトを説明するシリーズ番組を作ったりしている。こういったところは良いのだが、パーマネントのポストではなく週に3日通う非常勤。せっかく博物館と呼べる資料館も出来たので、これからも火砕流堆積物等について研究出来るような若いプロの専門員の人材を雇っていただきたいということをリクエストした。

もう一つ、稲積水中鍾乳洞という観光施設がある。ここは鍾乳洞だが、火砕流が入ってそこに流れ込んでいるというようなものらしい。今回はここには行っていない。というのは、完全に観光事業で、鍾乳洞の中でラフティングをやっているということもあり、これをどうしたらいいのか考えているという状況とのこと。ただ、パートナーシップを結んで、ちゃんと保全をしながら教育に活用しようということで、ちゃんとジオパークの中に位置付けるべきものであろうということ考えたので、是非それを進めて欲しい。事務局でもそれは考えているとのことだが、やはり観光の色が強いのでどうしたらいいのか迷っているということだったので、ここは県ともちゃんと協調しながらうまくパートナーシップを結ぶこと、ジオサイトとしても位置付けられるようにして下さいというお願いをした。

ジオ商品というのが焼酎で出来た。これはとても良いことだが、先程言ったようにジオパークとエコパーク、それから市の認定品と全部別になっている。豊後大野市の認定品は認定品として別々に作り、一方でジオパークのフレンドショップは色々あったり、ジオ商品が1個だけ出来たりという感じでちゃんとブランディングが出来ていない。これはちゃんと1本にして別々にやらないで欲しいと。せっかくジオパークで地域おこし、社会作りをしようとしている市なのだから、別々に認定品を作らないようにして下さいというお願いをした。

大分県は温泉県だそうだが、豊後大野市には温泉がない。でも、阿蘇山の所に穴を掘ってサウナ、石風呂をやるという文化が瀬戸内海地方からきてこの地に根付いているので、温泉県だけど温泉がないサウナ市で「まちづくり」をしようとしていて、それがちゃんとジオサイトである石風呂の文化的なものともマッチングしているので、それはとても良いことだと思った。でもそこにちゃんとジオサイト、ジオパークというのがまだ遠慮がちだったので、そんなところも是非進めてくださいというお願いをした。以上になる。

委員長：質問等あればお願いします。

委員：人事異動の弊害をもろに受けているジオパークだなという印象を受けた。これまで豊後大野ジオパークを引っ張ってきた2人のスパースターがいたと思うが、その2人は今どういう関わりをしているのか。

委員：2人には懇親会の時に来ていただいて話しを聞いた。基本的にお一人は農業関係の課に異動してしまってノータッチということ。もうお一人は現資料館の館長になっていてそこは繋がっている。えらい方になっているので、なかなか事務局は商工観光課がイコールでやっているの、教育関係の部分で今まできている

方々がいたので、学校教育とかが市長ももともと教育関係の役場の方だったのですごくそこは良いのだが、そこがすぼっと抜け落ちているという感じ。1個の資料について、これはいつ決めたのかという問いに対し、回答が返ってこない。本当にそこは難しいところだと思う。

事務局：今のご説明通りだと思うが、一応情報共有として、毎年 JGN の事務局に管理体制や運営組織の情報を提出していただいている。その中では別の部署に異動した方もまだ事務局員。なので、名前は載っているけど実際には動けない、つながっていないのではないかと今の報告を聞いて思った。

委員長：事務局体制の弱体化はグリーンカードで大丈夫か。聞いていて深刻なような気がした。

委員：そこは懇親会の時にもちくちくと言ったし、市長との最後の面談の時にも敢えて言った。報告書にも、現事務局はちゃんと地域に行き意見を吸い上げるようにしてほしいという部分も書くつもりでいる。そこはもうどうしようもない。市長も分かっている感じだった。認定品のことを言った時にも分かっている感じではあったので、そこはもう地方自治の中なので、どうにか改善されるのではないかと期待している。

委員長：前回の審査の経験からコメントをお願いしたい。

副委員長：豊後大野のジオパークのキャッチフレーズ「巨大火砕流から9万年、生命を紡ぐ豊後の水と大地の彩り」が長いということだが、前回私達が行った時にそういった指摘をしたあと、市がこれを重く受け止めてキャッチフレーズの委員会を作り、市民にも投票してもらい決めた。これが市民の皆さんにどれくらい定着しているのか今回聞きたかったところの一つ。

前回お話ししていた時に、事務局体制の良いところとして毎月1回ジオガイドさんと一緒に、ジオカフェというような形で意見交換、情報交換をしてジオパークの色々な課題を一緒に解決するような雰囲気があった。それが上手くまわっているかどうかというところと、ジオパークの事務局にいた方が、ジオパーク全国大会のために大分県に出向してかなりの力を注いだ。その後、また豊後大野市に戻られたと思うが、今ジオパークの事務局に関わっていないのか。

委員：ジオパークの事務局のメンバーになっている。ただ、事務局体制としてはそれでも十分ではない気がする。

ジオカフェについてはやっている。ただ、今の事務局の市役所商工観光課の事務局長や、他の新しく入った皆さんがガイドさんのところへ行って話すというのが圧倒的に足りない。専門員が全部代行してやっている。具体的な学術的アプローチや、事務局ではこんな事をやっているなどの橋渡しをして上手くやっているが、そこにちゃんと商工観光課の人達が行ってやるというのが圧倒的に足りていないと思う。ジオカフェ自体については、ガイドの皆さんがすごく良い雰囲気でやっている。

「巨大火砕流から9万年～」というテーマを作ったプロセスもすごく良い。これを会長自らがケーブルテレビを通じて、ステークホルダーをスタジオに呼び「これをどうしたらいいか。」というのを商工業者や学校の先生に聞いたりしてやっているの、これのほうがか市内に浸透している感じもする。本当に素晴らしいことだと思う。

一方で豊後大野ジオパークという看板が圧倒的にない。まずそこをやって欲しいということを、先程申し上げた通り。

副委員長：あともう1点、資料館が完成したということで、その資料館の位置付けは豊後大野のジオパークの拠点施設として位置付けると前ははっきりおっしゃっていたのに、今回名称に入っていないのに驚いた。

委員：全くその通り。拠点施設と言われ紹介されたのに、内容は素晴らしいが、一言もジオパークという言葉が入っていない。ジオミュージアムと言えばいいのではないかとこのも含めて、市長や事務局等には伝えた。ここは敢えて、緊急に対応すべき課題として突き付けて、おしりを叩いてエンカレッジしてあげたいのではと調査員で相談した。

副委員長：ジオパーク関連の展示はちゃんとあるのか。

委員：圧倒的にほぼ全部ジオパーク関連の展示。それは文化なども含めて、ちゃんとジオパークの中で位置付けられている感じはするのに、なぜか名称にジオパークが入っていない。

委員長：承知した。

委員長：他に意見があればお願いします。

委員：ユネスコエコパークとの連携を強めなければということだが、祖母・傾・大崩ユネスコエコパークは結構広い色んな自治体に跨っている中に、地理的にはこの豊後大野のジオパークが含まれている位置関係にあると思う。お互い持ち味を生かしながら相乗効果を高めていく中、モデル的な相乗効果の事例になって欲しいと期待するが、先程の説明で市長が相互に連携をしてはいけないものだと思っていたというコメントがあったという話のだが、そこは今回のやり取りで認識を改めて高めていただき連携を強めていただくという気持ちになっていただけたという理解でよろしいか。

委員：それは認識を改めていただけたと思う。後ろには両方やっている県の方達もいらっしやったので、県の方にもよろしく願いますというのは伝えた。豊後大野市でエコパークになっているのは山のほうの一部なので、まずはビジビリティということで看板を一緒に作って下さい、マークを共有して下さい、ちゃんと豊後大野ジオパーク、エコパークを2つ並べるところから始めて下さいという具体的な取っ掛かりをそういうふうにした。

期待としては、今後は小学校を中心としたジオ教育の積極的な取り組みがあるので、JGNの教育ワーキンググループに立山黒部に小学校の教員をされていてESDに取り組んでいる専門員の方がいるので、その方とつなげて次は教育の部分で進めてくれるといいのかなと思う。次の段階で事務局としてやっていただきたいのはビジビリティの改善で、エコパークと組んでいただいて、教育の部分で進めてくれるといいと思う。それは伝えまし、もう1回伝えるつもり。

委員：承知した。

委員長：他はあるか。特になければ判断したいと思うが、やはり可視性の問題や、事務局の姿勢が全然なっていないということを考えると私は個人的にはイエローなような気もする。皆さんはどうか。グリーンという提案があるがこれに反対の方はいるか。

一同：(意見なし)

委員長：今の可視性や事務局の姿勢についてきちんと書き込むということで、グリーンで賛成ということでしょうか。挙手及び拍手をお願いします。

一同：(挙手及び拍手)

委員長：私と委員1名は保留だが、多数決でグリーンということにする。いずれにしても私が言ったように、可視性のところできちんとミュージアムの事を書いて、他のところももっと見えるようにして欲しいということと、事務局にもっと積極的に地域の人と対話して欲しいということを書きつけて欲しいと思う。

ということで、条件付きなしの再認定としたいと思う。

副委員長：豊後大野のスターだったお二人だが、現在でも市内で一緒に仕事をしているわけなので、豊後大野のジオパークをスタートさせた人材と今の人材の人達の引継ぎや、理念の共有をもっとしっかり図っていただけるように言っていただけるとありがたい。

委員長：良いコメントだと思う。この議事録は、時差はあるが通知書と一緒に公開される。

【議題③ 再認定審査地域審査：三笠】

委員長：次は三笠。

委員：今回、三笠ジオパークへ10月25日と26日に調査して来た。ここからは一覧表に基づいて説明させていただきますと思う。

前回の審査での指摘事項が 11 項目あった。全体的に対応は全てされている。特に進捗があったという部分もある。他の調査項目もこれから説明するが、全体的には早急に何か対応しなければこのジオパークが成り立たないという問題はなく、非常に優れた点もあったのでグリーンカードで提案させていただきたいと思う。

前回の指摘事項の 1 つ目、地形地質遺産の調査研究と保全保護については、サイトカルテを作成した。位置や名称、カテゴリ等の他にどのような価値があるのか、利用をどのように出来るのかといったものをレーダーチャートの形で、各項目が一目で分かるような形で非常に分かりやすいものになっていた。

無形文化遺産目録の作成と継承・記録については、文献目録はどこにどのような文献があるかというリストが整備された。これについては、北海道博物館と協力してさらにカテゴリ分けなどをする予定になっているが、コロナの影響でストップしている部分がある。

3 番目の地質鉱物資源の販売中止に向けての努力については、アンモナイトの化石がお土産で売られていたが、これについては現在も完全にストップしているわけではない。道の駅に卸している方が 1 名いる。これについても対話はされていて、手持ちのストックがなくなった時点でストップするだろうとのこと。実際の調査期間中には、すでに売られている物はないという状況だった。

4 番目の炭鉱遺構の保全・保護については、炭鉱関連の遺産で実際に採掘していた関連の施設や、作業員の住居などの劣化がかなり進んでいる。そういったものについて何かしらの対応をして欲しいということについては、対応や調査を継続している。特筆すべきことは、この調査について補助金や予算がついてないのだが、ジオパークのグッズの販売の収入がこれに充てられており、ジオパークの経済効果と保全が結びついた事例として非常に評価できると思う。

5 番目の生物と炭鉱以外の分野についての研究を進めて行くということだが、具体的にはコロナの影響もあって進んではいないのだが、河岸段丘の調査なども計画をされているのと、博物館の研究紀要の投稿規程などが改定されて、人文系のもも受け入れられるようになったという進展があった。

6 番目の博物館における人文関係の展示の拡充ということについては、いくつかの展示室がリニューアルされてガイドなどしやすい形になっていたし、炭鉱関係の調査の成果などが盛り込まれた内容になっていた。

7 番目のガイドスキルの研鑽については、ジオパーク内の複数のエリアを案内できる A 級ガイドが今回誕生して、日本遺産などの他のプログラムについても説明できるということで、質の向上が図られているということが分かった。

8 番目のジオツーリズムの質と持続可能性の向上については、ここは特に評価できる点だと思う。ガイドツアーや教育旅行を含め、そういったものの収入が前回の審査からほぼ 4 倍になっている。入込数も昨年度は、コロナ禍にも関わらず史上最高になっており非常に伸びている。

9 番目の協議会の構成団体との連携や運営体制については、部会制度というのが出来て、3 つの部会がそれぞれきちんと仕事が出来るような体制になってきたという状況。

10 番目の地域住民との協働体制については、地域のイベント等をかなりバックアップするような形で、一緒にジオパークの活動をやるようなパートナーなど、そういった方が増えてきている。

自主財源の確保については、ジオツーリズムのところでも話しをさせていただいたが、ガイドの収入だけで 400 万円程度入っているということで、相当な伸びがあったと思う。

主な評価点については、課題への指摘のところでも話しをしているが、教育旅行を含めたそういったものの受け入れが非常に充実している。特に昨年度はジオツーリズムの教育活動について過去最高の集客人数で 5 千人を超えるような数字となっていて、「コロナ禍にもかかわらず」というのを強調しても良いと思うが、非常に伸びている。

グッズについても売り上げが 40 万円程度ということで、ジオパークの収益でそれが炭鉱遺産の調査にも

充てられているということで非常に良い循環が起きているのではないかと思います。

情報発信についてもイオンの三笠店にジオパークの情報発信拠点があたり、ジオパークニュースというのを地域のサポーターといった方々に配るような形になっている。こういったところを事務局の若手スタッフが任されるということで、人材育成も非常に進んでいる。

教育旅行については、しっかりと事前の資料、当日の資料、事後の資料まで備えていて、非常に質の高いものが行われている。

炭鉱遺産関係についての記録調査については、非常にしっかりと継続されていて、様々なエピソードや図面や写真等も博物館のリニューアルにも生かされたし、Google マップにそのデータを落とし込んで活用が出来る。

事務局も非常に充実している。11名いるということで、他のジオパークに比べてもかなり突出した人数だと思っている。若手が多いので、そういった方の人材育成に力を入れられており、今後の継続の可能性についても非常にしっかりしたものになっていると感じている。

ジオパークは経済効果を上げるというのが難しいというところで苦しんでいる所が多いと思うが、数字も人数も成果を出せるというのは特にすごいと感じた。

ただ、改善点もないわけではない。ここで11項目あげさせていただいた。特に早急に改善が必要なところはジオサイトの名称のところ、文化サイトを含めてジオサイトに入れているというのがあった。これは下位区分として文化サイトとするなど、そういったものを既にきちんと分けてあるので、表記の仕方を変えればいいということで対応が可能だと思うが、早急に改善が必要だと思っている。

あと、北海道内のジオパークを相互に紹介し合うというのはよくやっているが、JGN 全体の情報というのは中々手に入れられるものがないということで、そういった発信をしていただきたいというところ。

アンモナイトの化石に代表されるような蝦夷層群については、石炭層があるというのは町の成立と関わって説明されているので自分事として地域住民は感じられるが、アンモナイトと自分達というのはなかなか価値の結びつきが上手くまだ説明出来ていないという問題点はあると考えている。

SDGs や気候変動と自然災害に関しては、教育として問題を認識して伝えるというのはよく取り組まれているが、実際にゴール達成のための何かしらの具体的なアクションを起こすというのをこのジオパークでも是非取り組んでいただきたい。

5 番目の炭鉱遺産の保全・保護については、調査は良く進められているが、それを法的根拠を持っているような保全にまで結びつけるというのを具体的に進めていただきたいという指摘。

6 番目のダムやそういったものについては、ダムを建設するというので、建材として原石の採取が近くで行われているとのことで、自然に対して人間がある意味不可逆的な変化を与えているものもあるので、ダムのプラスの面だけではなく、マイナスの面も含めて見せるようなことをしていただきたい。

7 番目の三笠市の職員の構成についても問題がある。女性の比率が非常に低いので、ジェンダーバランスの改善を求めたいという考えである。

8 番目については良いこともあるが、少し大きな問題になる可能性がある。というのは、事務局員が負担している仕事の中で、教育旅行のガイド対応というのが非常に比重が高い。1日に何度もある、週に何度もあるので、その比重があまり大きすぎると新たな仕事や、まだ取り組めていない事が中々進まないという問題も生じる可能性があるのではないかと考えている。

あとはそんなに大きな問題ではないのだが、生態サイトの設定をしていただきたいということや、SDGs 達成のための具体的なアクションを行っていただきたい。

あと、地域のコミュニティにおいて協賛というような形で積極的には関わっているが、そこから独立してプレイヤーになっていただけの方を育成していただきたい。

これからさらに伸びていていただきたいので、こういった指摘をさせていただく。以上になる。

委員長：今のところについて質問等があればお願いします。

副委員長：丁寧に説明いただいたが、三笠のジオガイドさん達の活動はどんなものなのか教えて欲しい。

委員：ツアーを造成されていて、例えば、ワインや食などのツアーに参加するガイドとして対応することや、一番は教育旅行のガイド対応に積極的に参加している。活躍の場などはかなり確保されている状況だったと思う。

副委員長：事務局の方達が教育旅行に関わる比重が非常に高いということだが、そこら辺をジオガイドさんと分担など、そういう事の工夫というのはまだないのか。ジオガイドさんに任せられない部分があるのかなのか。

委員：任せてお願いしている部分はかなりあるのだが、圧倒的に受けている量が多いので、今いるガイドさん達で安定的に毎日というような対応は出来ないという状況。それでこのような状況になっている。

副委員長：承知した。

委員長：その他はあるか。

委員：改善点のところに出ていた蝦夷層群について、蝦夷層群にアンモナイトが産出して有名な場所だと思うが、住民の方がまだ自分事として理解されていないということは、具体的にはどこら辺まで認識されていて、まだ何が足りないということなのか。

委員：古生物学的な意義やそういったものは学芸員がいるので説明がされているが、それが今の私達にとってどういう意味があるのかというのは難しい部分もあると思う。重要性は多分認識されていると思う。なので、他のジオパークで思われている問題よりは結構進んでいると思うが、その先さらに今の私達にとって蝦夷層群の化石といった物がどうなのかというのを考えていけるジオパークだろうという指摘になる。

委員：やはりアンモナイトが出てくるので、そういった地質的な特色を理解してそれをちゃんと周知、アピール出来るような形に出来れば良いということか。

委員：その通り。

委員：承知した。

委員長：その他はあるか。

事務局：改善を求めるところの中で、ESD や SDGs の具体的な取り組みの扱い方や工夫というのがあったが、全国のジオパークの中では、三笠は教育旅行で SDGs を学べるジオパークとして売り出しているし、ESD も北海道の中の活動拠点になっている。なので、かなり意識して活動が進んでいる地域かと思うが、敢えて課題としてあげるとするのは、評価として高い点と思っていたがその点に関してはどうなのか。

委員：この部分を改善を求めるところとするのが適切かどうかというのは迷う点もあるが、他の地域よりもっと伸ばせる点だろうと。既に SDGs の達成度が見える化していたりするので、相当進んだ取り組みはされている。ただ、あえて厳しく言えば、まだどういう状況にあるかという現状を学べるという段階だと思う。それをどう具体的なアクションによって解決していくかというところまで取り組んでいけるレベルにこの地域はなっているだろうということなので、敢えて指摘するものだと考えているがどうか。皆さんのお知恵を借りたいと思っている。

委員長：指摘事項の改善を求めるところに3カ所くらい SDGs 関係が出てくるので、ちょっとこれは踏み込みすぎかなという気はする。ちゃんと評価してあげればそれを伸ばせるのではないかという気もする。

それから集客力が教育活動の向上にというのは、少し短絡しすぎている表現なのでこれは工夫していただけたらと思う。

その他はあるか。

委員：前回に審査をした。だいぶ進んでいるようで良かったと思った。

2点伺いたいのだが、1点目はこのジオパークは長く事務局にいる方の活躍がかなり目立っていて、その方以外の世代の育成、ポスト下村みたいなどころの育成が重要になってくると思うが、その辺りの人材の成長具合はいかがだったのか。

2点目は、炭鉱に関わる生活史についてだが、その収集について前回に私が行った時にはまだまだ足りていないところがあったが、今回拝見すると2017年から記憶記録事業が継続してなされているという報告がされていたので、その点は具体的にどのように進んで、ジオパークにどのように活用されているのか教えていただきたい。

委員：まず1点目の問題だが、それは感じるどころがあった。最終日に敢えて彼をはずして、他の事務局員の皆さんにヒアリングを行った。かなり影響力がある方なので、その後というのを考えると多少不安もあるようだが、先程普段からツアーの対応が多いという話しもしたが、終わった後に必ず反省会をやるとのこと。それで相当皆さん意見交換も出来ていて、彼ではなくても誰に聞き合えばいいのか、意見を出し合うかというのは相当やられているようなので、人材としてそれぞれ協力もし合えるし、自立出来る方も育ってきているような感じ。この部分は結構大丈夫そうかなというふうに感じている。そろそろ引き際みたいなのをご本人も考え始めているみたいなので、そういった意味でもそれは意識してやられているよう。

あともう1点の炭鉱遺産の生活史についてだが、実際に生活されていた方とかの聞き取り調査も進んできているようで、そういったものをかなり蓄積していて、今Googleマップの中に、例えば炭鉱長屋みたいなどころでこういったエピソードが聞けたという所を地図上に落として使えるような形で整備したり、今回リニューアルした展示の中でそういった情報を盛り込んだパネルというのを作ったりということで、かなり活用も実際されているようになってきていた。

委員：承知した。

委員長：その他の意見やコメントはあるか。

アンモナイトの販売の件は放置しておいてもいいのか。ちょっと気になる。

委員：もうストックもないようで新たに採取ということもやられていないので、これは見守りながらで多分大丈夫かなと感じている。

委員長：一業者だけか。

委員：一業者だけ。

委員長：業者が販売しているということか。

委員：道の駅に商品を持ち込んでいるという形。

委員長：承知した。引き続き何かやりそうなことがあると少し心配だという気がしたので、通知書のどこかに書くのも手かなと思ったがそれは必要ないということにする。

他に意見はあるか。それでは指摘事項を少し整理することにして、三笠を再認定ということにしたいと思う。これに反対の方はいるか。

一同：(意見なし)

委員長：賛成の方は挙手及び拍手をお願いします。

一同：(挙手及び拍手)

委員長：それでは三笠を再認定とする。

【記者発表資料作成】

※プレスリリース資料の文面を確認

【議題⑭ 再認定審査地域審査：とかち鹿追】

委員長：午後の部を開始する。議題⑭とかち鹿追の報告をお願いします。

委員：とかち鹿追ジオパークは「火山と凍れが育む命の物語」をテーマに、風穴のジオツアーや然別湖コタンの凍れが体験できる非常にユニークなジオパーク。その凍れを体験しようと12月6日から8日まで2人で調査に行ってきた。幸か不幸か然別湖が全然凍っておらず、異常に暖かい調査日和で調査としては良かったが、これも温暖化の影響かと非常に気になった。

鹿追町では永久凍土と生態系との関わりがジオパークの重要なテーマである。永久凍土がなくなるとジオパークとしての存在価値にかかわるので、鹿追町では2021年に鹿追型ゼロカーボンシティを宣言して、バイオガスプラントによる発電や水素の製造などの循環型社会を作る具体的な取り組みをしていることを現地で確認することが出来た。

結論から言うと、グリーンで良いのでは考えている。その理由について説明したい。

前回指摘されたのが8項目についての改善状況を説明する。

まず、学術専門員がいないのでその雇用について早急にするよというアドバイスがあった。これについてはすぐには対応出来なかったが、2021年4月に専門分野として1番ふさわしい方が雇用できた。しかもサイエンスコミュニケーターとしてのキャリア、南極の越冬経験などもあり、最適な人が雇用できたということで、これがジオパークにとって大きなリソースになると期待される。

推進協議会体制の強化については、2018年に町役場にジオパーク推進課を設置し、更にそして今年度に学術専門員が雇用されたということで4人体制で活発に活動している。推進体制の強化についてもクリアできたと思われる。

新地球学は、小中高の一貫のプログラムだったが、予算の期間が終わり後継プログラムの立ち上げが課題として指摘されたが、これについてはまだ後継のプログラムは出来ていない。しかし、小中高の各段階においてジオパーク学習は継続されており、例えば小学校だと1年間で20時間のジオパーク学習を課し、中学校でも取り組んでいる。鹿追高校でも新地球学の後継ではないが活発な取り組みをしている。道半ばではあるが、後継プログラムに向けて着実に進んでいるということを感じた。

地域の遺産の整理とリスト化については、リストの中にはジオサイト、文化サイト、自然サイトの区分がされているが、それがまだホームページなどで見える形で発信されていないので、不十分と判断される。

ストーリーやツアーの充実と解説看板の増設や改修については、山地部のストーリーはほぼ完ぺきに出来ているが、平野部のストーリーが課題とされた。平野部では「鹿追の大地とそばツアー」を通じて、大地と食とのジオストーリーができ始まっている。看板等の設置や改修も進められているのを確認した。

ネットワーク活動への積極的な参画と貢献については、各全国大会などに参加して道内の連携も進めているということで、これについても確認した。

情報発信の充実については、Facebookでリアルタイムに情報発信すると同時に、ホームページと広報誌を利用して地域の方への発信もかなり熱心に行われているということを確認した。これはほぼ達成だと思われる。

関連組織や他部局との連携強化と各業務の充実・発展については、鹿追はボトムアップのプラットフォーム型のジオパークということで、ジオパークをプラットフォームとして地域の人が使いやすいように色々考えられていて、これについても情報共有をLINE WORKSで行うなど色々やっている。風通しの良い運営が出来ているのだろうということを確認した。

まだ未達成なところもあるが、前回の指摘事項についてはかなり改善されたと判断している。

今回の調査で評価する点というのは、地域住民が非常に元気でボトムアップ型の活動をするということ。特に農家や酪農家との連携も非常に良さそうであるということと、以前から積極的に活動をしていた然別湖の

ネイチャーセンターの関係者とも、積極的に参加して気軽に意見を交換できるということが優れた点だと思った。

冒頭にも言ったように、鹿追型ゼロカーボンシティ宣言を行って、ジオパークの活動と連動して気候変動対策を積極的に取り組んでいるというのは鹿追の特徴だと思う。

新地球学は終了したが、後継に向けて積極的に関係者が活動しているということも確認した。

「鹿追の大地とそばツアー」については、新しい平野部のジオストーリーを作っているところがある。

然別湖周辺ではプロガイドが積極的にジオパークの活動をリードしてくれている。それと同時に地域住民によるジオパークのサポートガイドが協力して、ジオパークビジターセンターなどの展示を利用しながら観光客に対してジオストーリーを語るということが特徴。

全般的には非常に良く活動して、風通しも良い。学術的なサポートも福山大学の先生が引っ張ってこられたわけだが、今回もこの先生が同席されたがほとんど発言することもなく、ジオパークの関係者が自分の言葉でジオパークについて語っていたのが非常に印象的だった。先生も今回は自分の出番がなくて良かったというのが講評だった。

問題点ではなく、これからもっと良くしてほしいとの意味合いで5項目を指摘した。

①サイトリストについて、ジオサイト、自然サイト、文化サイト、その他のサイトのように分類して見える化するのが課題。

②ジオストーリーの中に、鉄道などを入れていくとさらに平野のストーリーが充実して欲しい。ビジターセンターの展示で、人のところが付け足しになっている。新たなジオストーリーを通じてビジターセンターの展示を充実させるということも課題。

③とちかち鹿追ジオパークでは、地域の農家や酪農家などの色々な事業者、研究機関と実質的なパートナーシップとして活発に活動されているが、正式なパートナーシップ協定が締結されていないところが課題かと思う。

④ゼロカーボンシティ宣言については、ジオパークと連携してその他のジオパークの模範となるようなグッドプラクティスを積極的に発信してらえたらと期待している。

⑤最後に新地球学の後継カリキュラムについては、各学校の特色に合わせて最適化することも必要かと思われる。学校によっても地域性もあるようなので、そこら辺は地域の住民の経験などを活用したカリキュラム作りやマネジメントを期待したい。

以上で報告を終わる。

委員長：ただ今の報告に対して質問等あればお願いします。

委員：然別湖や周辺の山岳の大雪山国立公園が一角になっており、このジオパークは平野部になっていると思うが、今の話しの中で、平野部の農家や酪農家の方が積極的に参加したプラットフォームが動いているという話しをととても興味深く聞いていた。このジオパークの活動に酪農家や農家の人達の参加が実現した秘訣、上手な巻き込み方など、そこら辺の背景が分かれば教えていただきたい。

委員：詳しい背景は聞きそびれてしまったが、地域の産業として酪農と大規模化の農業は町の基幹産業。200件くらい酪農家と農家がいって、その売り上げが200億円。1事業者当たり1億円の規模で、まさに町の基幹産業なので、ジオパークと連携すると、お互いwin-winな関係になるところなのではないかと感じた。

それから、見学した農家では土壌分析をきちりやって、科学的な作物栽培をしている。農業と地質地形という間に土壌があるが、土壌の分野を重要だと感じた。答えになっていないかもしれないが申し訳ない。

委員：承知した。

委員：ゼロカーボンシティ構想は、2050年のカーボンニュートラルに向けた形で非常に新しいというか、今後

ジオパークでも取り組まないといけない課題の1つではないかと思っているところ。一方で、具体的に2021年に立ち上がったばかりなので、それをどういう風にジオパークに生かすかという議論はされているのか。

あと、先程出ていたバイオガスについて、酪農家から出た糞尿などを含めたものが使われ自然再生エネルギーとされていくと思うが、その辺の議論は進んでいるのか。

委員：すでに議論ではなくプラントが動いている。1つは農家の糞尿の悪臭対策にもなるということで、嫌気性で発酵させてそれでメタンを作る。そのメタンを利用して発電し、発電した電気は鹿追町の中心部の役場、病院、図書館などの電力需要をまかなっている。

それから、余熱を利用してチョウザメを飼育しキャビアを生産したり、マンゴーを栽培したりなどそういう北の国にはない果物を作ったりしているので、見学者も多いと伺っている。

委員：承知した。もう1点だけ、地球温暖化で永久凍土のところが危ういという話が出たが、これは結構深刻なのか。

委員：まだ大丈夫なようではあるが、5万年前からの永久凍土の記録が残っているので、これがなくなるということは、ジオパークとしての存続の危機なので、他のジオパークと比べて率先して気候変動対策に取り組んでいる印象を受けた。

委員：承知した。

委員長：ジオパークとしてカーボンシティ構想あるいはその取り組みはどう活用しているのか。その辺がよく分からない。

委員：カーボンシティ構想は町の事業であるが、そ永久凍土を守るところに結びついているという理解だった。

委員長：ジオパークとしてこういう風にやっているという宣伝をしているとか、そういうところまではいってないのか。

委員：まだ。これからのジオパークの気候変動対策の1つのモデル、良い事例となる事をやっているの、こういうのを積極的に発信して下さいということをお伝えした。

委員長：ジオパークとして、こういうやり方でやっているという宣伝の仕方をやって欲しい気がする。

事務局：プログレスレポートの中では第3期中期計画が2021年から2024年の計画となっているが、その中で鹿追型ゼロカーボンシティを強調していくということが明記されている。第3期中期計画ではその中に踏み込んでさらにどういう具体的活動をしていくなどのことも書かれているのか。

委員：そこら辺は確認していない。確認しておく。

委員長：その他はあるか。ないようなのでここで判断したいと思う。提案通りグリーンということで承認するのが良いかと思うが、反対の方はいるか。

一同：(意見なし)

委員長：賛成の方は挙手及び拍手をお願いします。

一同：(挙手及び拍手)

委員長：保留の方はいるか。

一同：(意見なし)

委員長：賛成多数なので、とかち鹿追と再認定とする。

【議題⑤ 再認定審査地域審査：四国西予】

委員長：続いて四国西予。

委員：四国西予は平成30年7月に大きな豪雨災害を経験しており、ジオパーク活動が一時ストップしていた。にも関わらず、見ていただくと分かる様に前回の指摘が21項目、さらに1つの項目に複数の課題が提案されていたので、おそらく40項目くらいの指摘事項に真摯に対応してきたことに敬意を表したい。全ての項

目について何らかの対応をしており、その星取り表を付けている。特に評価される点は◎、課題もしくは今後検討して欲しいところは△もしくは×と書いている。結論から言うと、グリーンカードで提案したいと思っている。

まず優れている点は、協議会内の活動が非常に活発かつ安定的ということが分かった。1つ目は4つの部会が具体的な活動を推進しているが、その部会は最初、協議会の会員を役職に割り当てていたのだが活動が形骸化してしまったので、それを1回シャッフルして、立候補制もしくは他薦、自薦、推薦を取り、少数精鋭部会に変えた。その結果、地域内のジオパーク活動が活性化して地域住民が主体的にジオパーク活動に関わっているという構図が出来上がってきた。これは非常に画期的な事だと思う。なので、当初ジオパークの事務局のスタッフを拡充して欲しいというリコメンデーションがなされていたが、その必要は全くなく、事務局と地域住民の関わりとの連携が非常に良く取れているというのが評価される点である。

2つ目が人事異動に伴うジオパーク活動の衰退を食い止めるための工夫。実は、西予市内にジオパーク推進委員会というのが置かれている。前回の指摘では、推進アドバイザーという表現になっている。この推進委員に所属している人はかつてジオパークの事務局長、もしくはジオパーク推進室の室長の経験者で、今は違う場所にいるが、何かヘルプとなった時に自分の仕事としてジオパークに関わるという仕組みがとれている。つまり、ジオパークの組織から外れてもジオパーク活動に参画できるような仕組みを市役所内に作っている。これもまた非常に評価できる点だと思う。

3つ目。教育活動を広げていく点で、どうしても熱意のある学校の先生が異動になってしまうとジオパーク活動がなくなってしまう、あるいは衰退してしまうということがあがるが、それをなるべく最小限に食い止めるための「四国西予ジオパークまなびのガイドブック」を作り、教育活動の衰退が人事異動によって起こらないようにしているのも非常に評価される点である。

前回の指摘でもあったが、ようやく拠点施設というのが出来て四国西予ジオパークミュージアム、それから災害で被災してしまった建物の中に災害伝承室というものが作られて、災害伝承室は実質的に防災教育プログラムに活用しているという実績がある。ジオパークミュージアムについても、その活用計画に基づいて情報の発信、強化、さらに学術研究の推進というものが行われる見込みが立っている。

ということで、非常に良い活動が展開されているが、その中でこれを進めたらさらに良いだろうというのが、次のリコメンデーションになる。ここでは8つあげている。大きく分けると、サイトの再整備をすること、ジオツーリズムの体制整備、それからジオパークプログラムの概念の理解の3点。

サイトの再整備については、実はジオパークのサイト設定については、いわゆる地質サイト、文化サイト、生態サイト、拠点施設、ビュースポット、という分け方を推奨しているが、四国西予ジオパークは協議に協議を重ねた結果、地質遺産という独自の分類をしてしまっているので、これをやめて地質サイトに一本化して欲しい。結局、サイトというものが完全に確定していないことが災いして、保全計画というのがきちんとしたものがない。実際にサイトの保全活動というものは、ガイドさんもしくはその関連するサポーターさんで実質的にやられているが、その計画がなされていないということで、是非保全計画を作って欲しい。

前回の指摘でもあったが、文化サイトといものに関してやはりちょっと少ない。縄文時代の遺跡や様々な文化サイトがあるものをもうちょっとジオパークの中で位置付けていただきたいということのリコメンデーションしたいと思う。

ツーリズムについては、実際に西予市観光物産協会というところがジオパークに関するツーリズム、外に出す商品作りは出来るがまだまだそこが弱い。例えば、ジオパークに関連するようなツアーがあるがそこにロゴマークがなかったり、マップがちょっと見にくかったり、お客さん目線での情報発信がちょっと弱いので、そこは何とかして欲しい。

特に改善して欲しいと思うのは、四国西予ジオパークを周遊するためのモデルコースを見せること。パン

フレットには載っているが、四国西予ジオパークのWeb サイトにはモデルコースが載っていない。それが結局、サイトやエリア内の周遊の効率化を妨げているので、四国西予ジオパークの多様性を楽しんで欲しい、と言うのであれば、モデルコースを設定しそれを発信して欲しいというのをリコメンドしたいと思う。

ジオパークプログラムの概念の理解だが、実際に計画を立て綿密にジオパークプログラムを推進しているが、地域住民の関わりが非常に急速に広がった分、ジオパークというものをよく分かっていないまま、ただジオパークと言っている面もあると思う。それが実際にはガイドさんの質のバラつきや、ロゴマークが上手く掲示出来ていないというような事態を招いている。実際に推進計画に掲げている項目、あるいはそれを實際に行動で解決していく行動計画、それに掲げている項目とユネスコ世界ジオパークの基準がどう関係しているのかという事を関係者が理解すると、さらに地に足が着いたジオパークの活動が推進出来るのではないかと考えた。

ということで繰り返すが、四国西予についてはグリーンを提案させていただく。以上になる。

委員長：ただ今の報告に対して質問、コメント等あればお願いします。

委員：前回に行った時に標高差があったり、西から東でもともと旧市町村が違ったりなどして、なかなかそういう連携というのは難しい部分があったように見えたが、その辺りは今回見られて改善やもうすでに良くなっている部分はあったか。

委員：地域住民内の交流というのはかなり進んだ印象がある。やはり、部会というものが少数精鋭になって、人の交流が非常にしやすくなったというのが大きい。月1回~2回程度のミーティングで関係者が集まって協議をしているという構図になっているので、地域間におけるバラつきというのはあまり感じなかった。

ただ、ある意味、色んな形で色んな人が関われる仕組みになってしまっているのが、事務局のコーディネーターが非常に難しい。ただ、それを支えている地域住民がいるのも事実なので、全体としては非常に良くまわっていると思う。

委員：もともと合併したところが一体感を出すというのもジオパークの目的だったと思う。それは達成されているのか。

委員：旧町単位でのまとまりはもともとあるのでこのコミュニティは上手に生かしつつ、その全体のコーディネートを事務局がしている状況。特に推進委員会、アドバイザーが、かつてジオパークの推進室長だった方がちょうど良い感じでバランスを取っているというのが非常に優れた仕組みだと思っている。

委員：承知した。

委員：先程の豊後大野にも関わるが、人事異動の弊害が引き起こす停滞を防ぐためにジオパーク推進委員会というのを役場に作っているという話があったが、もう少し詳しく教えていただけると他にも参考になるのではないかと思います。どんな仕組みになっているのか。

委員：これは今のジオパークの事務局長が審査を経験していなかったもので、過去にどんな事業をしていたのかその実績になかなか触れられない。すごく良い事をやっているのだからそれを知りたいので気軽に入手出来るような仕組みが欲しいということで、ジオパークの前事務局長、さらに推進室長の人達を役所の中でジオパークに関わる事を自分の仕事としてやれるようにして欲しいとのことで、それを市長に直談判して市長がそれを制度として認めた。なので、実際の今の室長は社会教育課にいるが、ジオパークに関わる仕事、例えば審査の時に何があったのか、前回どんな事をやったのか教えてくれと言ったら、自分の業務としてその仕事に関わる事が出来る。ボランティアではなくちゃんと給料が出るという形になっている。

特に、前回の指摘事項がどんな背景で出されたのか、という事に関しても経験者がいればその指摘が出てきた背景というのをきちんと次の人に伝えられるので、新しく入ってきた職員もジオパークの過去の実績にスムーズに触れる事が出来る。同じ市役所内の職員なので、関係性も非常に良くして同僚たちの中で知見が市役所内で引き継がれている。この事は会長に会ってベタ褒めしてきた。

委員：承知した。去年の鳥海山もそうだったが、歴代の事務局長が違う部署にいてもちゃんと審査の時には集まってサポートしていたという事があるので、しっかりしているジオパークとそうでないジオパークの市町村の違いというのはそこ。トップの判断によって、スーパー公務員を認めるかどうかということ。豊後大野にも伝える。

委員長：今の話して、推進委員は人事発令はあるのか。それとも事業で位置付けているのか。

委員：委員なので正式に位置付けていると思う。おそらく市長がジオパーク推進委員として委嘱をしていると思う。なので、実際の職場は教育委員会社会教育課にはなるが、それとは別に委員としての職を委嘱して、何かあれば委員として出向くという構図になっているよう。

委員長：承知した。

委員：今の点で、推進委員の仕組みの話しをとっても興味深く話しを聞いていた。なかなか異動で部署が変わった人が、業務として前の部署の仕事に関わるのは行政としてはなかなかハードルが高いことだと思う。こういう仕組みを作って、違う部署に行った人もジオパークの活動にここぞという時に関われるという関係は、他の場所でもすごく参考になるのではと思った。

委員：是非、日本のジオパークに広がって欲しい。

委員：災害と関係した件だが、以前に西予のジオサイトの目玉の一つである須崎海岸という所で進入路の崩壊があった。その後どうしたのか。保全計画がないので、私にその問い合わせがきた時に、その崖は手当てをしないといけないというアドバイスをして、とにかく落ちた石ころだけ退けて通れるようにしたらどうかという話しをした。そういう話しはでたか。

委員：須崎海岸の崩落現場については、先生の指摘に従ってモニタリングをしている。そのモニタリングをしているのは地元の地質コンサルタント担当会社で、前の専門員が勤めている会社。実際にそこでは崩落土砂の移動がどのような形で行われているのかというのを非常に綿密に調べており、その成果を地域住民の説明会で説明をしたりしている。それで崩落の要因が分かったという話しがでていた。

今のところ、須崎海岸については屋形船で海からアクセス出来るので、黒瀬川構造帯が非常に重要かつ綺麗な露頭の観察というのは海からやっている状態。それを小学校のジオパーク学習などでも提供しているという事なので、当面の間は崩落した道の土砂はどけることはなく、しばらくモニタリングを続けてどのような形で安定していくのかというプロセスをモニターして欲しいと提案した。私としてはどっちにしろ植物が生えてくるので、どんな植物が最初に生えてくるのかというのを合わせてモニタリングすればいいのではないかと提案をしてきた。非常に綿密かつ丁寧な調査がなされ、それが定期的に地域住民に発信されているということが確認できた。

委員：承知した。「災い転じて福となす」ということで、良い活動をしているのを聞いて安心した。

委員長：その他はあるか。非常に良い報告だったと思う。

委員：もう1個アピールさせていただきたい。実際に四国西予のジオパークの中で、もともと専門員で入っていた人が今は地域に残って、その人が先程のガイドさん向けの学びのガイドブックを作ったり、教育事業を集めた教育プログラムの冊子を作ったりしている。ジオパークの協議会でなかなか手が届かないところを形にしてくれているスーパーマンがいる。そういった方の取り組みをもっとJGCでも評価して欲しい。ジオパークに地に足を付けた活動を第一線でやっている人が地域に残っているということが非常に素晴らしいと思うので、こういったジオパークがどんどん増えてくるといいなと思っている。

委員長：グッドプラクティス賞みたいな感じ。その他はあるか。

なければこの辺で判断したいと思う。四国西予ジオパークは認定ということで認めたいと思うが反対の方はいるか。

一同：(意見なし)

委員長：賛成の方は挙手か拍手をお願いします。

一同：(挙手及び拍手)

委員長：それでは四国西予を再認定とする。

【議題⑩ ユネスコ世界ジオパーク審査事前確認（現状確認）：山陰海岸】

委員長：次は議題がちょっと変わる。ユネスコ世界ジオパーク審査事前確認ということで、山陰海岸の現状確認をする。調査担当委員から報告をお願いします。

委員：それでは現状の報告をさせていただきます。12月22日のJGCの会議を受けて、12月27日に山陰海岸世界ユネスコジオパークの事務局、JGN事務局、文部科学省にも参加いただいて、プログレスレポートの中身について我々の提案をしてきた。

実際に2つあったのだが、1つ目はリコメンデーションdで、玄武洞公園における科学的価値の発信、それからそれまでの活動のプログレスを書いて欲しいという事だったが、実際に玄武洞ガイドクラブという現場で実際にガイドサービスを提供してきた団体が解散するという事が決まり、それを機に活動の部分がバツサリと無くなってしまい非常にまずい。特に、国際的価値を有するサイトにおける活動がきちんとプログレスレポートに表現されていないというのは非常によろしくない。実際に何もしてきていないわけではないので、それをちゃんと明記して欲しいという事を伝えてきた。

結論から言うと、全面的に私達の指摘、あるいはリクエストに関しては受けていただいて、一応提案していただいた原稿ももらっている。ただ、もうちょっと書いてもいいのかなという気がするが、当初のものよりは改善が認められた。ギリギリにはなるが、もうちょっとこの辺を現地と協議をしていきたいと思っている。

2つ目は、玄武洞ミュージアムにおける地質資源鉱物における販売行為について。これは玄武洞ミュージアムが玄武洞公園の目の前で非常に綺麗にリニューアルされて、博物館相当施設としてもぱっと分かる。審査に来た人は絶対そこは見たくなると思う。ただ、ミュージアムショップでは、よその国で採取された岩石鉱物資源が販売されているという事実がある。その改善を求めるとのがなかなか現状では難しい。であれば、地質資源の販売行為についてはとにかく、ユネスコ世界ジオパークのクライテリアの中では非常に重要な位置を占めているということを改めて現地に伝えると同時に、どうしてそういったことがユネスコで問題視されるのか、ということの販売に関わる関係者がきちんと理解をする場を設けてはどうかということ提案してきた。それについても前向きに検討してくれるとのこと。

下手をすると一発でやられてしまうような可能性がゼロではない要素が出てきてしまっているが、それに向けて何かJGCとしてサポートを出来ないかというのを考えていければと思う。

委員：特に補足はないが、どういうふうに進めていくのかどうかを調査を担当した私たちのほうでモニタリング、お話しを継続的にやりながら状況を確認して、世界審査まで繋げていくというのが一番良いやり方ではないかと思う。

委員長：事務局からも何かあればお願いしたい。

事務局：玄武洞のガイド団体名は固有名詞を使わずに「ガイド団体の活動は」と書き換えるということ一旦決着がつくみたいだが、今後ガイドさん達の活動がどう引き継がれていくのかなど、一部希望者がいればその方々が活動を続けられるのかという辺りは今から模索するという段階で、12月末にヒアリングした段階ではまだ何も決まっていないということだった。その辺りが今後気になるところではある。

今回、協議会の立ち位置と豊岡市の立ち位置がヒアリングしていて正直よく分からなかった。協議会の説明が豊岡市の立場のように聞こえ、協議会としてはどう調整したのかということも聞いてもよく私は分からなかった。

委員長：ただ今の報告について質問等あればお願いします。

委員：I 点目のガイドサービスの関係で、ガイドクラブは解散したわけだが、玄武洞でのガイドサービス、ガイド活動というのは誰がどうやるのかというのは流動的だが、ガイドサービス活動は継続されるというのは事務局側でもそういう考え方でいると理解してよろしいか。

委員：その通り。玄武洞におけるガイドサービスは、この後委託業者が変わり、地元のバス会社が運営する予定。当初は委託業者が既存のガイド団体にガイドサービスを委託するということが制度上出来たみたいだが、結局その辺の話が上手く伝わってなかったみたいで、これまで活動してきた人達が離れてしまった。それはお互い言い分が違うのでどっちが正しいのか分からないが、少なくともガイドサービスを提供していく事は変わらない。ただ、問題は、今まで玄武洞公園で提供されていたガイドサービスのノウハウが、新しい委託業者になった人達にどれくらい引き継げるかによってかなり変わってくると思う。もしかしたらすごく良いサービスになる可能性もゼロではないが、玄武洞でのガイドは地磁気の反転という目に見えない事をおもしろおかしく伝えていくという難しさがあるので、それはなかなか一朝一夕には出来ないだろう。なので、そのノウハウをどうやって受け継ぎ引き継いでいくかというところは事務局、もしくは、そこに兵庫県立大学が実際に関わっているの、兵庫県立大学の先生達にも支援いただきながら、その辺の仕組みは続けていって欲しいと思う。

委員：承知した。

委員長：その他はあるか。

委員：リコメンデーションの f と h についてだが、特に f が英語を読むと全く答えになっていないと思うが、これは修正する予定はあるのか。指摘されているのは気候変動と、過去の気候についての論文をもっと研究して下さいということだが、これに対しては 2001 年と 1975 年にレポートが出ていることと、他の国の気候変動についてリサーチしていることを答えているので、的外れではないかと思うのでそこは修正が欲しい。

委員：この件だが、「実際には鳥取砂丘の研究はしていない。なので、答えようがない」と言われた。これしか書けない。

委員：逆に「砂の研究を何々の理由で行っていない」と加えた方がよいのではないか。これを読むと書いた人が質問を分かっていないような捉え方をしてしまうので、ちゃんと課題は分かっているがこういう理由で行っていないと記載した方がいいのではないかと思う

委員：何か一言書き加えるように提案したいと思う。

委員長：その他はあるか。

事務局：f だけではなくて、かみ合っていないと思うところは他にも多々ある。それをこの段階でどこまでアドバイスできるか微妙だが、一旦お伝えしてみるしかないと思っている。すでに夏に相当伝えていただいているのに、改善されていないのでどこまで言っても修正出来ないかもしれないというのが現状。

委員長：玄武洞関係では結局、協議会ではどうしたいのかというのは何か意見があるのか。豊岡市のことはよく分かるが、協議会としてこうありたいという声明みたいなのは出しているのか。

委員：聞いていない。ただし、ガイドクラブにいた人がガイド部会の部会長だったりするので、結局協議会組織の維持にも関わる問題ではある。もしかしたらそういったところを事務局が分かっていた可能性もあり、協議会としてどうこうというのがない。どうしたらいいのかという感じ。

委員長：ここはずっと見ていて協議会があまり機能していない。

委員：組織が大きいからというものもあるかもしれない。

委員長：なかなか難しい問題。鉱物販売について JGC としてどうしたらいいかというのがあったが、これは先程委員がおっしゃったように対話、モニターを続けていくということではどうか。それ以外に委員会としてすべき事はあるか。

委員：鉱物の販売については、他の地域も何かしらの個人や団体が石を売っていたりすると思う。なので、ゼロスタートというか、ユネスコの基本的な理念、考え方をちゃんとお伝えして、販売業者を仲間外れにさせることなく、ユネスコ世界ジオパークに関わるからこそ地質資源の売買の問題点が分かってきたというステップが大事だと思う。そういった問題を販売業者と一緒に考えながら進められるかどうかというところが今後の評価のポイントになってくると思う。そこら辺のところのサポートで対話のきっかけを作ったり、繋げたりなど、仕事が出来れば良いなと思っている。

委員長：承知した。JGN の販売に関するワーキンググループと一緒に、委員会の委員も全部参加して議論していくことが必要かもしれない。我々も何となくこういう形というのは分かるが、詳しく突っ込まれると悩むところもあるので、我々もちゃんと議論してどういう具合に対応していくか、日本特有な体質も考えながら今後考えていく必要があると思う。もちろん現地のほうは調査員にウォッチしてもらって、そこに還元できるような形で進められればと思う。

その他、意見はあるか。文科省から何かあるか。一緒に聞いていて、ユネスコ側からこうだというのはあるか。

日本ユネスコ国内委員会事務局：先程、報告いただいたことが全てかと思っていたが、鉱物の販売の件は他のジオパークがどうかというのを私もよく分からないが、あそこまでたくさんの面積でたくさん売られていて、かつネットにもいっぱい写真があがっているので、審査員ではない人が見てもこれはかなり危うい感じだと思う。その危機感を地元の人に言っても「彼らは自由ですからね。」と最後に言っていて、それはちょっと許せないとは思っている。その理念を何回言っても全く理解していないというのはよろしくないと思うので、もしよろしければ JGC のほうから強めに言っていただいたほうが私はいいかなと思っている。

あともう一つガイドの話だが、あれは私達の話の中でも感情論になっているという話しがでた。聞くところによると指定管理者制度の関係で色々入札があって、その中で玄武洞ガイドクラブもやりたかったのに結局負けてしまって、だからやらないというところもあるのではないかとというのが垣間見られるような説明を受けていて、その人達がアンチジオパークみたいにならないようにしましょうというところも話しをして、納得してもらっているが、本当にどこまでケア出来るのかといのは個人にかかっているみたいになっているのが少し心配。

ガイドクラブの部会長は玄武洞ガイドクラブの代表の方がやられていて、任期は取り敢えず3月まであるのでそれまではいるが、それ以降は考えるということが報告されている。その時点で、私は協議会としてどうなのかなと思っている、かなり危ういと思っている。JGC のほうから強く言ってもらったほうがいい。石の案内などを大々的に言っているのを見るとアウトだと思っている。

委員長：非常に良く伝わる感想だった。強く言っても、販売している業者には何も伝わらない。事務局にはものすごく伝わると思う。

日本ユネスコ国内委員会事務局：事務局もあきらめかけているのではないかと考えているので、こちらからさすがに石を売っている社長に話すのは無理なので、もうちょっと粘り強く行きましょうと言ってあげないと「何回言ってもダメなんですよね。」みたいになっているところがあると私は思う。

委員長：私もそういうのを感じる。

委員：玄武洞ガイドクラブについてはお話しをしていたところ、それを言ってしまうと豊岡市がかわいそうとか、3月に任期を終えたらまた考えとか、この仕事はここに引き継げるなどのテクニカルな問題を言ったりしていた。本当に重要な問題というのは、積極的に活動していた1つの団体が行政のやり方によって潰れたとか無くなってしまう。なので、そういう積極的に活動していた人達がジオパーク活動から離れる可能性がある危機だと思う。それについて本当に協議会として話し合われるのかどうかということかすごく不安で、そういった本質的なところにちゃんと向き合って取り組んで、行政主体で運営してもそれに対応出来

る形に持っていけるかどうか、変容していけるかどうかというのがポイントだと思っている。私の中でも、あの感じだと協議会の中で話し合われるのかというのがちょっと疑問。

委員長：委員会からも協議会がちゃんと機能してくれるように働きかける。悪いところは悪いときちんと言っていく事が必要だと思う。そのやり方については、引き続き調査担当委員と調整してやっていきたいと思う。これについては次回も議論する。

【議題⑰ ユネスコ世界ジオパーク審査事前確認（現状確認）：阿蘇】

委員長：次は阿蘇。報告をお願いします。

委員：経緯を復習すると、9月の第43回の委員会でこれは極めて危険な状況であるという事を報告して、10月20日の阿蘇の噴火に合わせるように委員長、調査担当委員、文科省から1名が現地に行って直接、協議会の会長らと話しをしていただいた。

その結果、事務局の体制が一新され、事務局長が交代し新しい体制に移った。もう1つは、協議会の事務局が来年の4月から阿蘇の火山博物館から阿蘇デザインセンターの方に移るということを12月の委員会の時に現地に行った調査担当委員から説明いただいた。ちょうどその直前にプロGRESSレポートを送っていただいたが、前回の委員会の時の12月22日には間に合うことが出来ず、お正月に見させていただき、担当委員二人のコメントをプロGRESSレポートに書きこんだのが先程チャットで事務局より送られている。

このプロGRESSレポートは、こちらの指摘を受けて、日本語のプロGRESSレポートからかなり内容が変えられている。事務局体制も新しい事務局体制が掲載されている。前回の日本語よりはかなり良くなっている気はするが、読んでみるとまだ日本語で直してそれを英訳しているというのがあり、日本人の私も読んでいて変だなというのがあるので、英文についてはもう少しブラッシュアップしないといけないところはたくさんある。私たちが気付いているところをコメントしているのが今の状況。これについて、またご意見をいただければありがたい。

委員長：特にこの部分は間違っているとか、こうした方がいいというのではないか。

委員：読んでいて1番気になるのが、最後のConclusionがConclusionになっていない。もう少ししっかりまとめをして欲しい。ここら辺が練られていない感じがした。

事務局：そこはコメント通りだと思う。疑問点が他にあって、コメントで今後の財政計画についても加筆してくださいと書かれているが、これはプロGRESSレポートなので過去のものでいいのではないかという認識で私はいた。審査員が来た時に確かに4~5年分の予算を見せてもらって、それを審査のミッションレポートにはいつも書いているので、この段階では財政計画はいらないのではないか。これについては委員の皆さんはいかがか。このままコメントを投げて大丈夫か。

委員長：今年まで入っているのか。

事務局：はい。

委員長：それをそれ以降のものを付け加えた方がいいかという話しか。

事務局：計画についての説明を加筆するよというコメントが入れられている。

委員長：具体的な金額ではなく例えば、この分は引き続き保障されているという事を付け加えるということなのだろうか。

委員：プロGRESSレポートの原本のだいたい上にメモがあると思うが、確かに予算に関しては今後も確保されていることを示して下さいと書いていたような覚えがある。なので、委員長がおっしゃったように、今後の4年間の予算も同じ形で確保されているというような書き方で、入れることが出来れば入れたほうが良いと思う。

事務局：承知した。数字まで明記出来ればしてもいいけど、しなくても一文入れるくらい。

委員長：今頃気付いてもしょうがないが、ナショナルガバメントからの予算が一昨年で終わっているのは原因があったのか。県の予算がなくなったのを確保して下さいというのはあったが、ナショナルガバメントからの収入がここで去年からゼロ。これは何か理由があるのか。

事務局：この理由は分からない。

委員長：これはつっこまれると思うので、説明が書かれているといいと思う。

事務局：承知した。

委員長：確認をお願いします。不自然に思うからこの分はどうという説明があれば問題ないと思う。総額はそんなに変わらない。

その他のコメントはあるか。

委員：今、テンプレートを確認したところ将来の事は書いていなかった、失礼した。

委員長：承知した。でも何か書いておいたほうが良い。

その他コメントや質問はあるか。

事務局：早く修正しないと文科省に渡すのが遅れてしまう。来週には文科省に渡したいと思っている。

委員長：今日中に見ていただいて、遅くとも今週中に意見をいただきたい。

事務局：先程の山陰海岸についても同じでよろしいか。一部変更しているのか。

委員：変更している。なので、そこは早めに改修しなければならない。それは現地事務局も分かっているので私がコメントを返しているが、少なくとも今日明日中には、日本語英語版をそれぞれ揃えて出してくださいということにはなと思う。

委員長：山陰海岸についても、今日中に見ていただいて意見があればいただきたい。

事務局：山陰海岸は今回ヒアリング後に変えられたところは、特にリコメンデーションdの玄武洞でのガイドさんのところを、ガイド団体が活動していたとかチバニアン研究のことが書き加わるということと、パートナーシップのところガイドさんの活動が出てくるという2点。それ以外のところはまだ変更されていないので、それ以外のところがあればお願いします。

【議題⑧ 新規認定審査地域：五島列島】

委員長：議題の⑧、新規認定審査地域の五島列島の現状確認。これは事務局からお願いします。

事務局：前回の12月22日の委員会でも報告させていただいたが、現在保留になっている五島列島のその後の対応だが、地域名称とエリアが揃っていないという問題で、12月27日にオブザーバーとして新上五島町に復活してもらうということや、今後の活動について一緒にやっていくという意思表示のようなこともしてもらいたいということで、事務局レベルで話し合いが持たれている。

その結果、新上五島町は今までと同様に現段階では地域住民の盛り上がりはまだ不足しているので、それを理由に断られたとのこと。ただ、五島列島という名称を使って現在の日本ジオパークの申請をしていることや、新上五島町もそれを了承した上で進めているというのを伝えて構わないということで相手からはコメントをいただいている。

五島市としては範囲の拡大を前提として、五島列島という名称を使っていきたいとのこと。今後、認定されればカッコを付けた形で「五島列島(下五島地域)」という名称を使っていくのが一番いいのではないかと考えており、認定されればこれからの4年間の中で新上五島町が参加をすとか、見送りになったとしても、五島列島という名称を使ってとにかく進めていきたいという決定を11日の週に協議会の関係者のところを持ち回り決裁という形で決定をして、議会へ回答を提出するというので現在進めているという連絡をいただいたところ。

委員長：今のところそういう提案が出て来ているということで、新上五島町は議論をして五島列島の名称を使

うのはいいけれども、まだ協議会のオブザーバーとして参加するほどには地域が盛り上がっていない。名称としては、「五島列島（下五島地域）」という名称を提案してきている。

事務局：もう 1 点、このことは文章として今後提出される予定であるが、その前段として今回の結果が認定、不認定だったとしても、エリアと名称の問題は新上五島町の協力が得られないからこういう結果が出たのだというように言われてしまうと今後の地域の協議にも影響が出るので、その事については特別配慮いただきたいと言われている。

委員長：承知した。そういう名称の問題で新上五島町がごねたからこうなったという事にはしたくないという報告。前回保留にしたのは、特に名称の問題が強かったと思う。その他にもいくつか問題はあるが、ただ保留にした 1 年間で解決するような問題ではないので、取り敢えずの課題は名称であるという事に前回したと思う。先程の事務局の話のように提案してきたが、これを受けて判断するのはどうかということだと思う。調査を担当したお二人の意見を聞きたいと思う。

委員：事務局が言ったように、五島列島ジオパーク推進協議会としてはカッコに下五島地域と入れて良いという判断でよろしかったか。

委員長：こう決める方向だが、仮にこれに関してコメントがあればそれを考慮するという事だと思う。

委員：新上五島町の「ノー」にびっくりだが、現地審査に行った時も新上五島町が参加することについても説明がなかったし、結構深刻な問題かと思う。前回の審議にも出たように、下五島町の地域のほうでかなり盛り上がりがあって、良い取り組みがかなり進んでいるので不認定にされてしまうとちょっと残念なところがあるかなと思う。あまり意見になっていなくて申し訳ない。

委員：今回、現地に行った感触では、新上五島町の参加は少し時間がかかりそうな気がする。下五島地域に関しては、ジオパークの仲間に入ってくれるという事については前向きにとらえていいと思っているので、今チャットで送っていただいた名称で認めるという事についてはそんなに問題はないかと私個人としては思う。

委員長：ただ、やり方としては「下五島地域ジオパーク」というのはあり得る。そうなると、せっかく今狙っている統一した五島列島を目指すという方向からはかなり後退する事になる。

そういう意味で、この提案は良いのではないかという気がするが、他の皆さんはいかがか。地元はこの名称について助言していただければというように言っているので、委員会の意見として答えたいと思う。

副委員長：前回保留の時の審査員の 1 人だが、ここまで時間を使って新上五島町のほうをジオパークに向かせる事が出来なかったのは少し残念ではあるが、私も今後「五島列島（下五島地域）」にすることには異議はない。ただ、やはり今のジオパークの皆さんが今後新上五島町についてどのような働きかけをしていくのかというような、もう少し具体的なプラン等があってもいいかなと思う。

あとはジオパークになることで、下五島地域の活動が活性化してきた時に、改めて上五島の皆さんもそういった姿を見て少し関心を寄せてくるという可能性も大いにあると思うので、常に良い関係でいて欲しい。それぞれお互いの地域が良い関係でジオパークを上手に使っていただけるような方向性を模索していただければと思う。

委員長：おっしゃる通りだと思う。

委員：私も下五島地域に関して言えば、前回以降かなり努力されて取り組みを前進させたという事があるので、今回もまた先送りになってモチベーションが下がってしまうよりは、下五島地域に関してはここで認定までたどり着いて、認定を受けた活動展開が始まるというふうに何とかなればいいなと思う。

名称については、下五島側としては時間をかけてでも上五島のほうに働きかけを続けて行くという意思の表れでもあるのではないかと思うので、下五島側と上五島側がこじれる事なく少し時間がかかったとしても、下五島の実際の認定を受けた取り組みを見ながら、上五島の人達の気持ちが変わっていくのではないかとい

う思いからこういう名称でいきたいのではないかと理解した。

委員長：過去にはこういうのがあるというのをチャットにコメントをしているので、皆さん読んで欲しい。

委員：南アルプスもカッコ付きだった。新上五島町を巻き込むポテンシャルとしては、地域住民の活動が非常に活発で、地元の環境保全などをやっている団体が福江の方でやっていた活動をさらに新上五島の方にも広げて、住民主体で活動に巻き込もうという事を続けてやっている。なので、人員の部分では比較的活動のエッセンスは上五島の方にも伝わっている。これまでもやってきている。後は行政側の働きかけとして、五島市の方から新上五島に働きかけを是非して行って欲しい。その中で、新上五島に関しては世界遺産を軸にやるというお話しをしていたような気がするが、実際、ジオパークと世界遺産というのはそれぞれリンクする必要があるし、それぞれ違う形で価値を伝えられるプログラムなので、それぞれの相乗効果があるのだという事を新上五島の方が分かれば、ジオパークの活動にも参画してくれるという筋はあると思う。なので、五島の方から新上五島の方に、住民側と行政側のそれぞれ実際の活動の部分や、ジオパークの理念というものを広げられるポテンシャルはあると思うので、是非カッコ付きの流れでもいいので認定してあげられたらと思っている。

委員長：チャットで色々と飛んでいるが、説明をお願いしたい。

委員：チャットに書いてくれたのは、「五島列島（下五島地域）ジオパーク」と五島列島ジオパーク推進協議会という事だったので、協議会の名称では下五島地域が書かれていないという認識でいいのか。

委員長：浅間山の例を出すと、浅間山は一緒になる事を考えながら、取り敢えず北だけをジオパークにした。ただ、協議会名としては浅間山ジオパーク推進協議会になっているので、これと同じという指摘だと思う。

委員：承知した。

副委員長：南アルプスは「中央構造線エリア」と言っているので、「五島列島（下五島エリア）」とした方がパークとしての面白さが伝わるかなと思った。

委員長：他の皆さんはいかがか。今の名称についてご意見いただきたい。これは正に現地が反映したい助言だと思う。「エリア」がいいのか、「地域」がいいのか。

委員：「エリア」が良いと思う。

委員：「エリア」が良い。

委員長：私は「地域」が良い。

副委員長：海が入っているし、何となく「エリア」かなというイメージ。

委員：「地域」は重い感じがする。

委員：行政的なにおいがしてしまう。「エリア」であれば全体を考えてという感じ。

委員長：筑波山地域という名称もある。

委員：どっちでも良いが、語感的な問題で「エリア」。「筑波山地域」という名称はどうかと思っている。

委員長：筑波山エリアジオパークは変。馴染みがないだけかもしれない。簡単に決を取ろうと思う。

事務局：これはあくまでも決めるのは地域。「エリア」という案もあるという助言をするという事でよいか。それとも、提案をするかどうかという決なのか。

委員長：どっちがメジャーなのかを知りたいだけで、委員会ではこの声が大きかったという報告をすればいいと思っている。

それでは「エリア」がいいと思う方は拍手をお願いします。

一同：(拍手)

委員長：圧倒的に多い。

委員：「地域」に一票。

委員長：このような意見分布を伝える事にする。事務局、それでよろしいか。

事務局：承知した。

委員長：それを踏まえた上で、五島列島を新規認定するかどうかを聞きたいと思う。時期尚早だという人がいれば議論を続けるが、いかがか。

一同：(意見なし)

委員長：それでは五島列島ジオパーク構想地域を、五島列島(下五島エリア)あるいは(地域)という形で新規認定するという方向で反対の方は挙手をお願いする。

一同：(意見なし)

委員長：それでは賛成の人は挙手をお願いする。

一同：(挙手)

委員長：出席者全員が賛成という事で、五島列島を新規認定とする。

【記者発表資料作成】

※プレスリリース資料の文面を確認

【議題⑨ 東京地学協会表彰の副賞の取り扱いについて】

委員長：次は議題⑨の東京地学協会表彰の副賞の取り扱いについて。

これは歴史の深い東京地学協会というところがあり、そこから日本ジオパーク委員会と日本ジオパークネットワークが11月15日に普及功労賞をいただいた。その授賞式に私とJGN理事長、JGN事務局長、JGN事務局次長が参加して賞状をいただいた。地学協会のビルの中で授賞式を行い、私とJGN理事長がプレゼンを行った。その時に副賞としてもらったのがこの目録で、その中に金五十万円を2つの団体にいただいた。それぞれではなく、両方で金五十万円である。

これを今後どう活用するのだが、割り算すると25万円が日本ジオパーク委員会分だが、この活用についてどなたか提案がある方はいるか。もともとこの委員会は予算を持っていなくて、JGN事務局が文科省に申請している事業費の中から運営費が一部払われている。使い道があったとしても、誰が管理して使うのかというのがはっきりしていない。

委員：出版物を出すというのはどうか。

委員長：面倒を見ていただけか。

委員：ガイドブックとか。もっと大変になるか。

委員長：委員会で出すかという問題になる。ネットワークとして活用してもらうのは良いと思うが、委員会としてそこまで皆さんに努力いただけるかどうか。

委員：カレンダーやポスターはいつもどうしているのか。

委員長：いつもは協力団体が作成してくれるので、それを活用しているのが現状。それに見合う物を短期的に作ろうと思っても、あまり報われないような気がする。

委員：良い提案かどうか分からないが、前の審議で、カウンスルにもっとJGCの皆さんが出ることが言われていた。例えば、海外の審査員になるには、海外の審査員になるためのトレーニングコースと大会に参加しなければならないので、その旅費にあてるのはどうか。ジオパークと関係ない人が行くという感じ。

事務局：ただ、ジオパークと関係ない人は、審査員の要件を満たしていない。今のところは8年間の経験が問われている。要件が変われば別だが。

委員：承知した。

委員：JGN事務局の会計に関する規定が分からないが、JGCには管理する法人またはグループとして管理する能力はないということか。

委員長：決めるのはこちらだが、事務局を JGN にやってもらっている状況。先ほどの提案も JGN 事務局に渡し
ておいて、必要になれば我々が請求するという形はあり得ると思う。

副委員長：全部 JGN へお渡しして、お任せするのが良いのではないかと思う。

委員長：私もその意見に近い。みなさん拍手をいただいているので、今提案されたように、この 25 万円は JGN
で活用してもらおうということで、JGN に 25 万円を移管するということで決めたいと思う。

【その他】

委員長：今日の議題はこれで終わったわけだが、事務局は何かあるか。あるいは、皆さんのほうで何か議論し
て行きたい事があれば願います。

事務局：先程からお伝えしているが、阿蘇と山陰海岸のプログレスレポートに関しては、何かあれば今日中に
願います。

プレスリリース文は本日共有させていただくが、こちらに関しては、去年の 1 月 2 月の会議の最終日の時
にかなり劇的に変更をしてしまって、その後に評価しすぎだと現地から言われたり、調査担当委員ほうから
も「改変し過ぎたのではないか。」と言われたりなど、色々課題があったので今回は大幅な修正はせず一旦
これはほぼ確定ということで、修文すべき微細なところがあればこの間に見ていただければと思う。

最終確定と発表は、次回の 28 日の第 44 回 JGC 第 3 部の終了後に 16 頃からリリースする予定にしている
ので、取り扱いにはご協力をお願いしたい。よろしく願います。

委員長：審査結果通知書だが、次の委員会くらいまでに修正等をやっていききたいと思う。意見交換の中で、「こ
こはこういう事を盛り込んだほうが良い」とか、「これはこう変えたほうが良い」などそういったこともあ
ったと思うので、まず作成した人が見ていただいて、作成した案を事務局は返してもらおうということにしたい
と思う。

もう一度言うが、審査結果通知書は審査に行った人が今回の議論を踏まえて修正いただいて、事務局によ
せてもらう。それを委員のメンバーのメーリングリストで修正をして、1 月末には確定したいと思っている
のでよろしく願います。

事務局：今の委員長からの通知書の件だが、固有名詞が間違っていないかどうかや、正式に発出する前に現地
に確認をしていただくのだが、それはあくまでも 28 日の発表後になるので、その点だけは注意をお願いし
たい。

委員：29 日の審査基準検討会について、何か情報が分かればアナウンスをお願いしたい。

事務局：調査に行かれた方のメーリングリストというのがあり、調査に行かれた中で 1 月 29 日の審査基準検
討会議で議論すべき点について教えていただきたいと願っているところだが、まだ 1 件しかリアクショ
ンがない。それ以外に、これまでいただいた自己評価 A の新規様式での課題や疑問点がいくつかよせられて
いるので、それらは議論することになるかと思う。それ以外は、今は待っている状況。

委員長：皆さん審査の段階で自己評価表のチェックをしていく時に、色んな疑問があったと思う。それを全部
出していただいて、今度の研修会でそれを議題にあげられればと思う。

委員：事務的なことだが、委員会の資料が講評される前に一覧表の誤字脱字を直さなければいけないと思うが、
審査に行った人が直すのか事務局に願えるのかどちらなのか。

委員長：一覧表は公開するのだったか。

事務局：一覧表の公開は今後しないことになった。前回に決定した。通知書に関しては、公開していくことが
委員会で決定されたのでそのようにしたいが、JGN のほうで共有出来てなかったため、1 月 19 日にオンライ
ンで全地域事務局長会議があるので、その時に情報共有をした上で、その後に公開するという流れになる。

委員：承知した。

委員：29日の検討会だが、90%の確率で参加できないが、それでも検討していただきたい事項を送っても問題ないか。

委員長：問題ない。

委員：では送らせていただく。

委員長：その他はあるか。

事務局：もし、28日の委員会で、追加で議論、協議すべき事項があれば教えていただけたらと思う。

委員長：28日は少し余裕があるので、皆さんから議題をいただければそれを盛り込んだ形で通知した通りの開催にしたいと思う。議論すべき事があれば、議題の提出をよろしく願います。

皆さん、長丁場ありがとうございました。次回の1月28日までにやる事がいくつかあると思うので、皆さんよろしく願います。